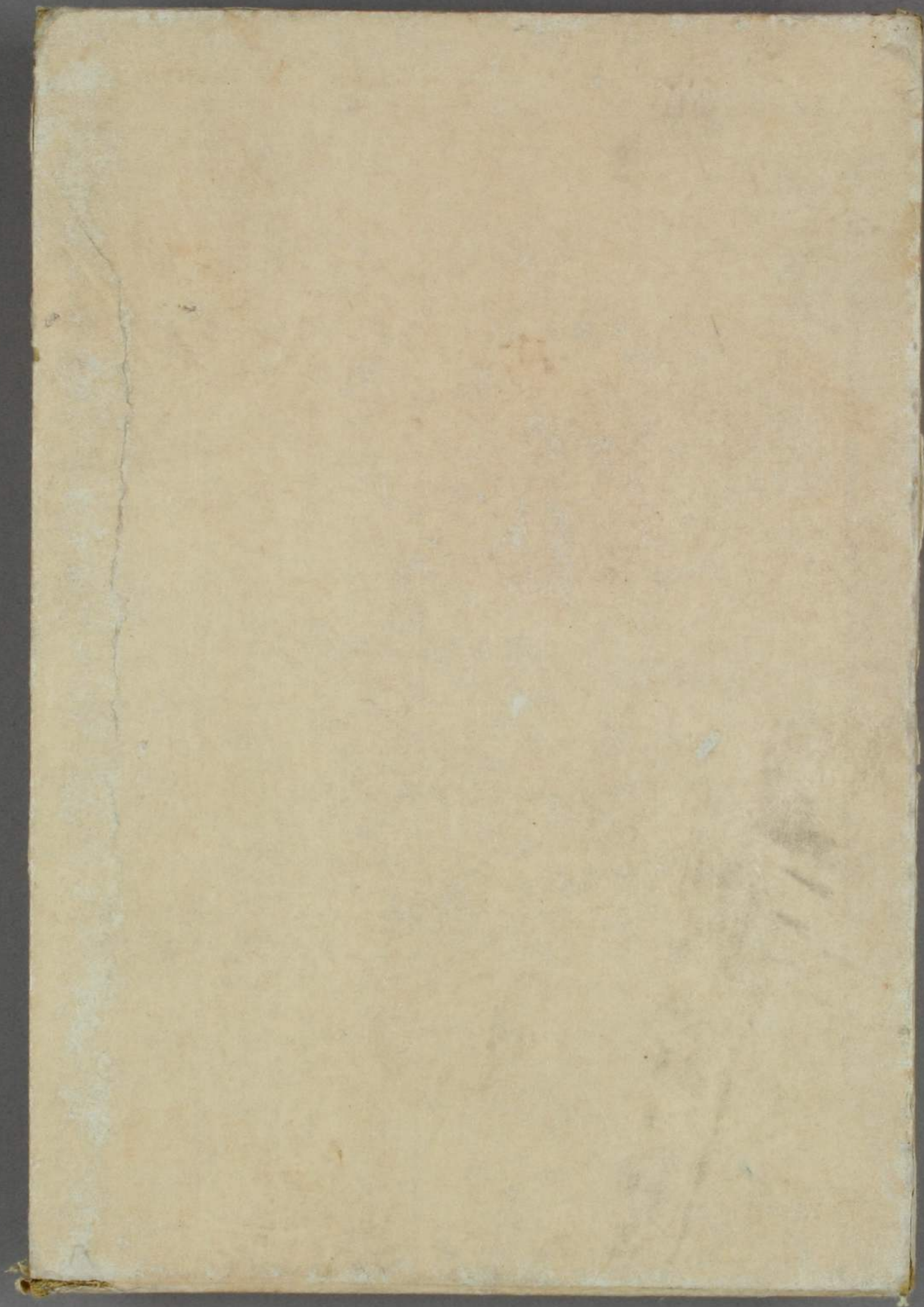
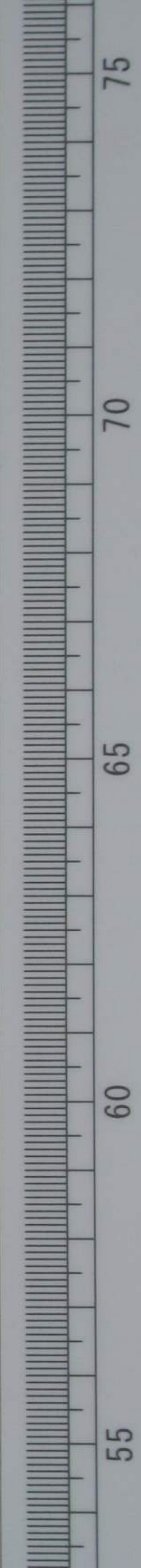
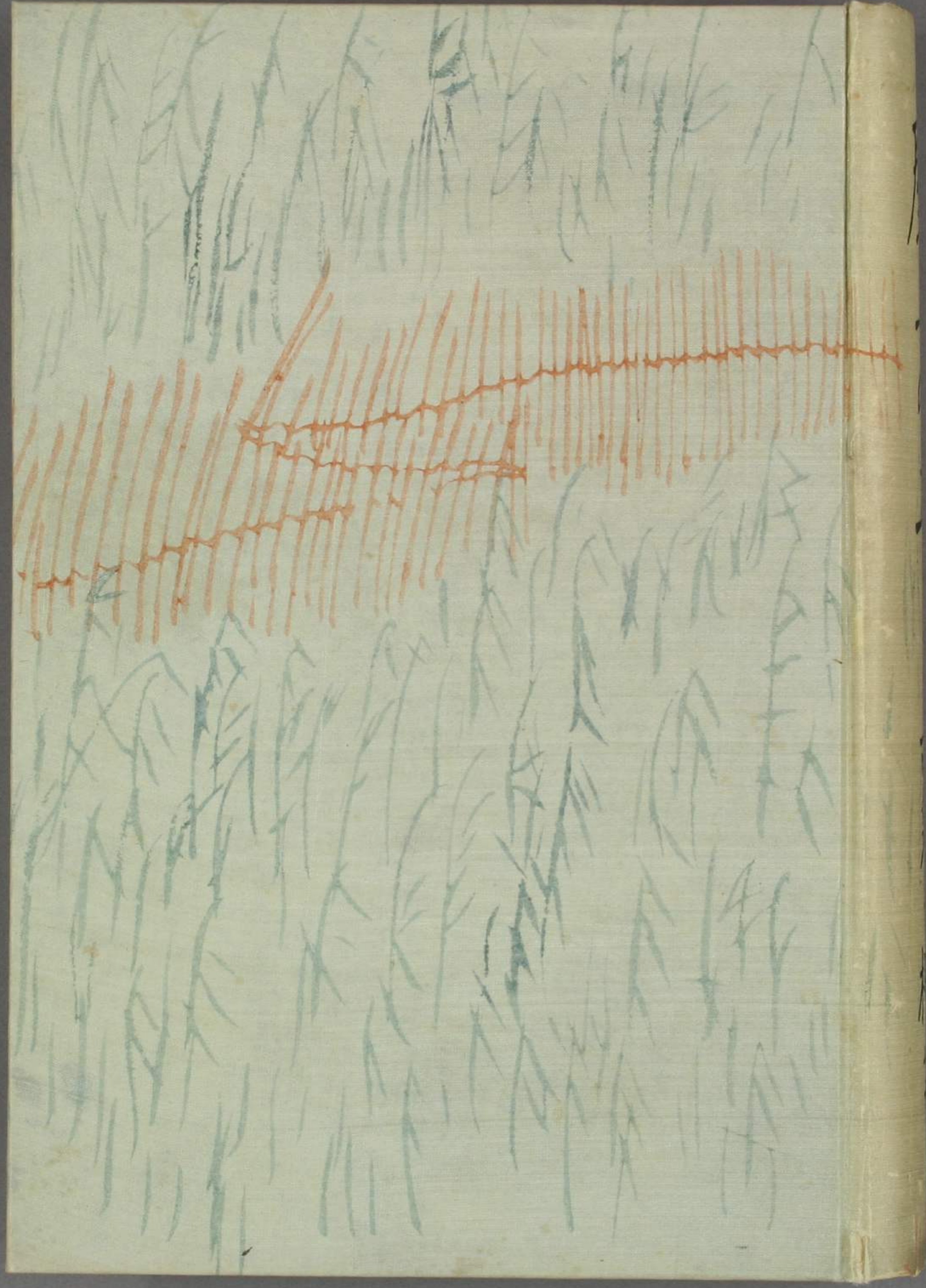
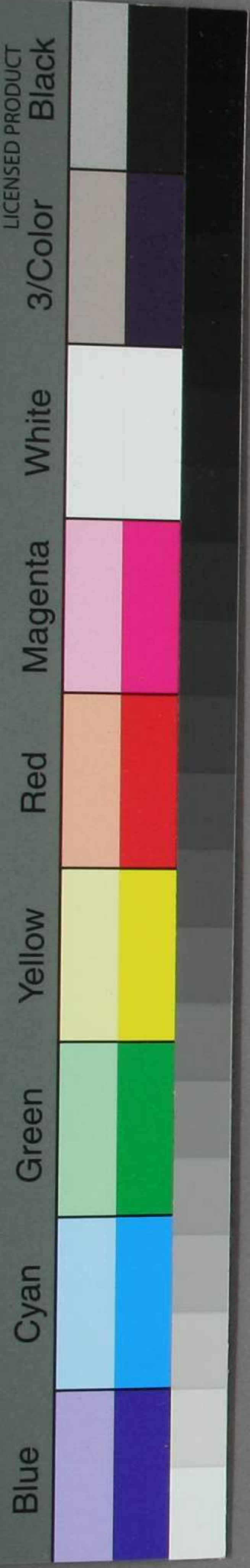


屋上の土

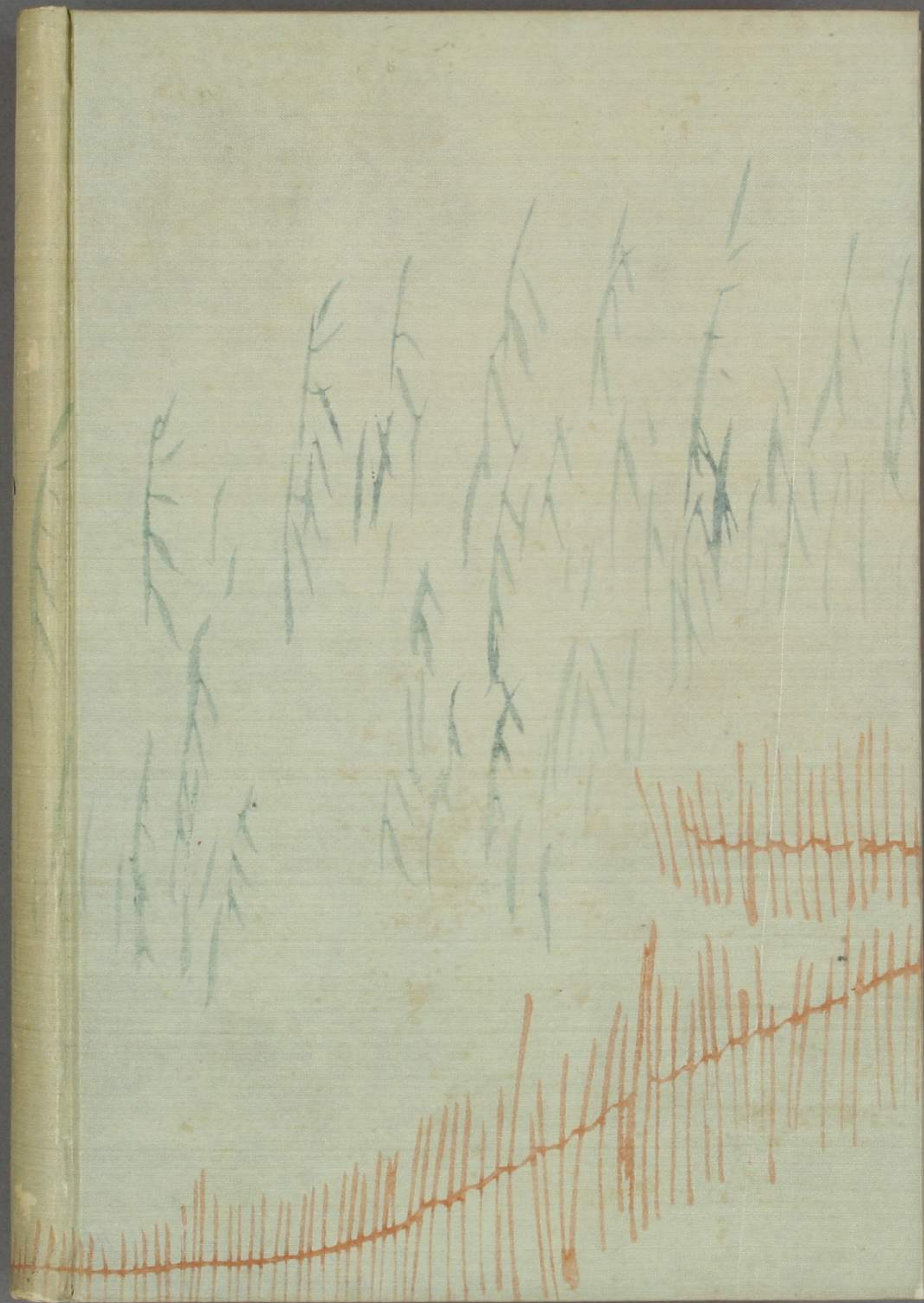
古泉千櫛著

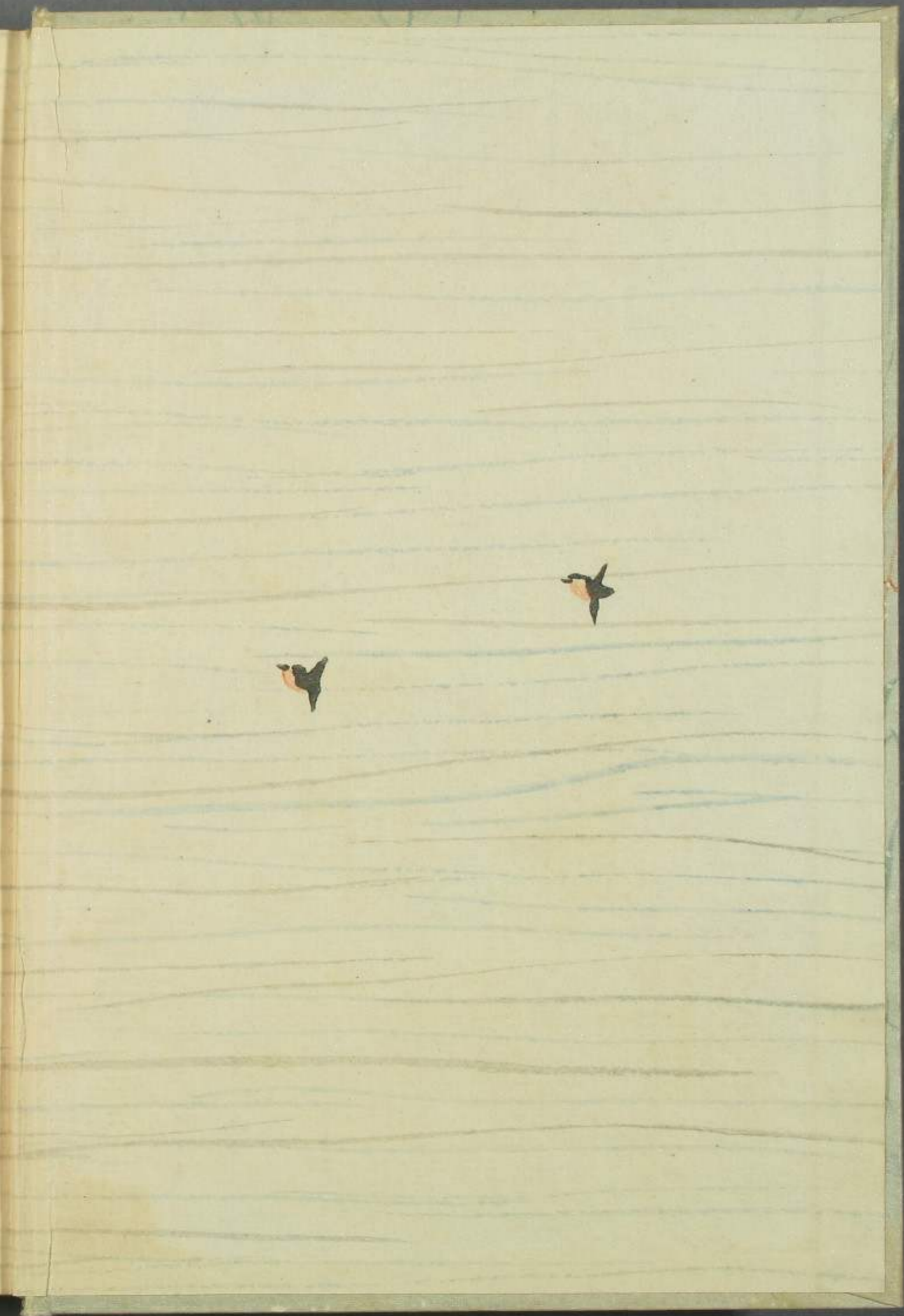
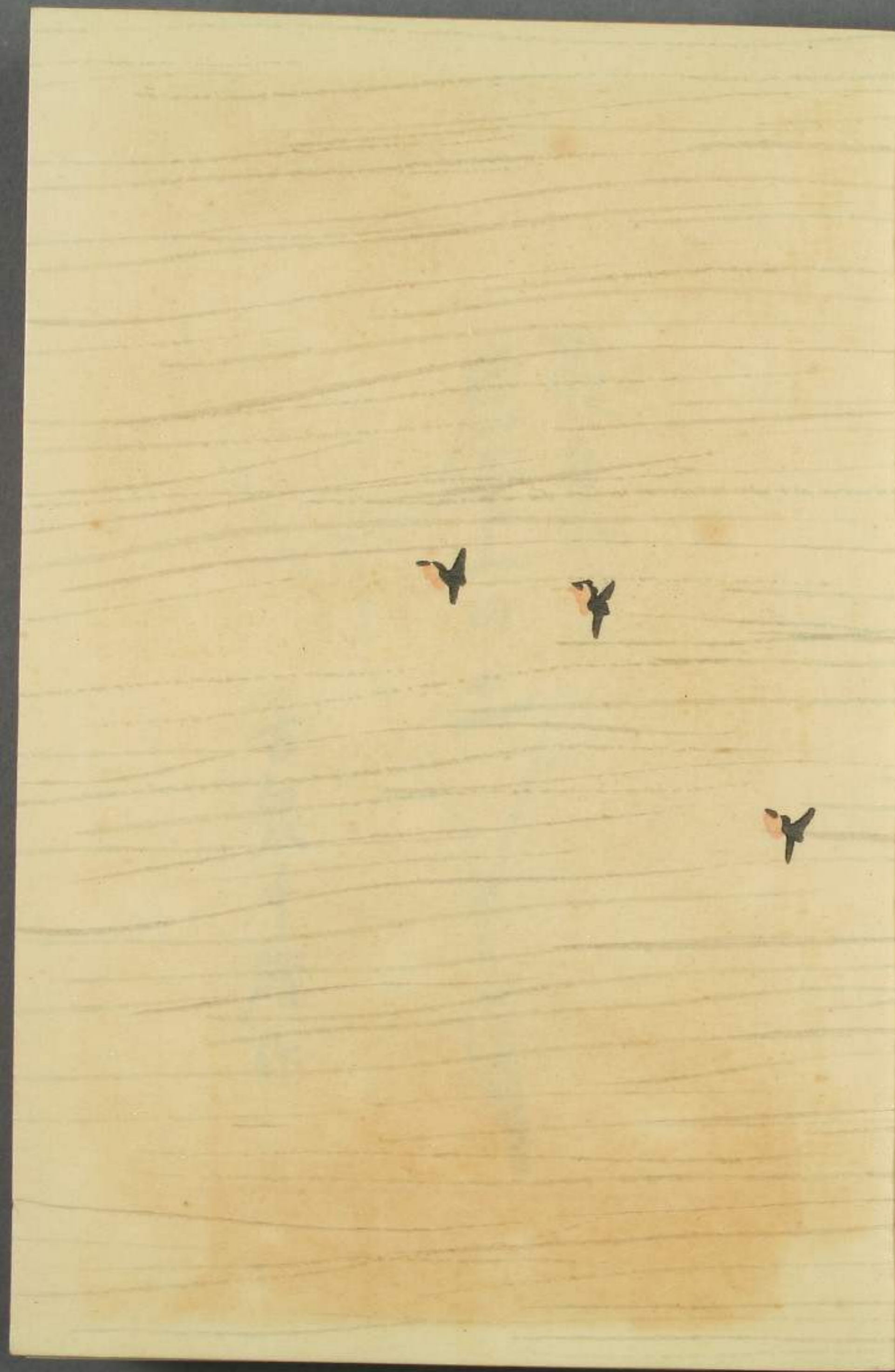


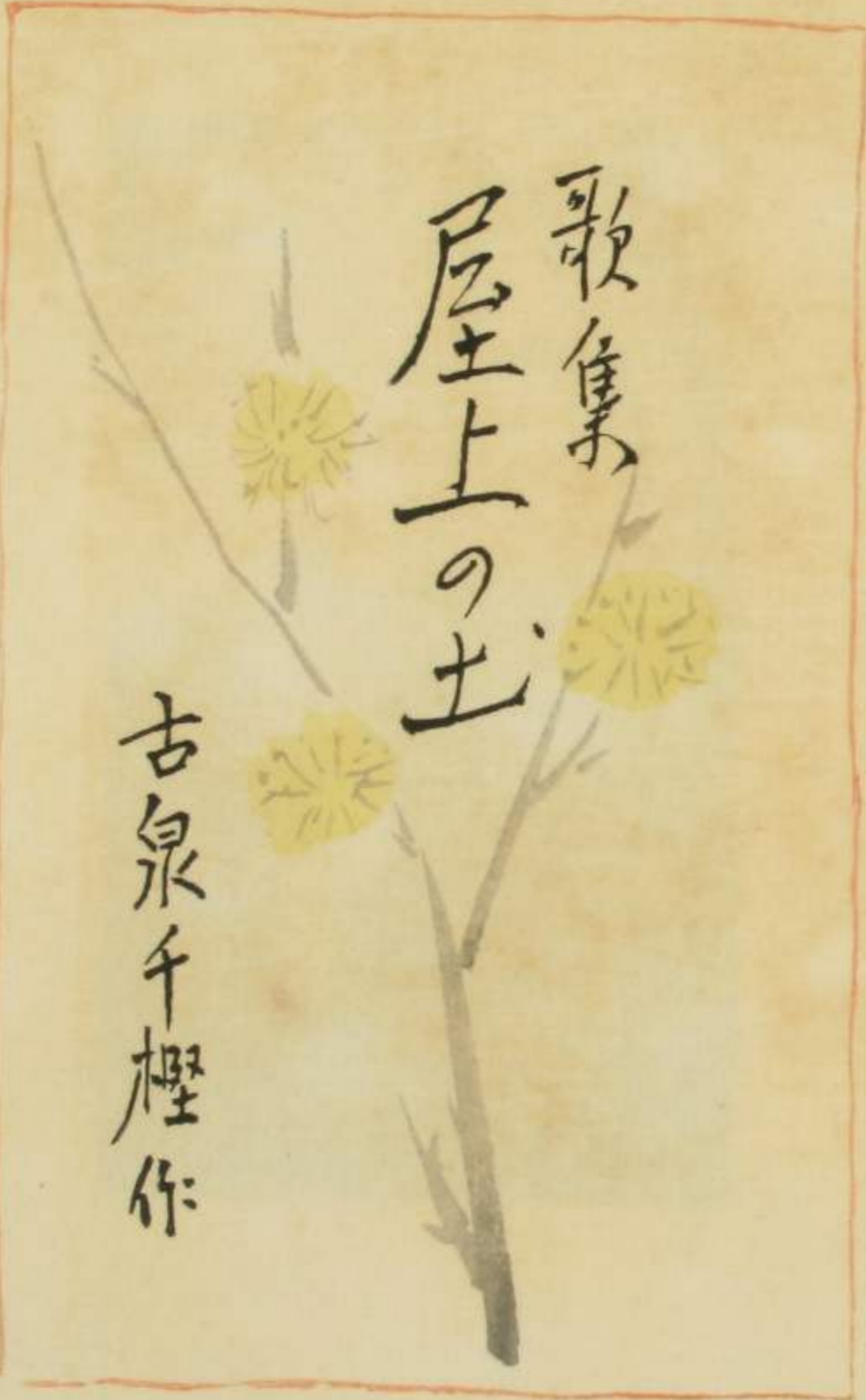


屋上の土

古泉千櫛著

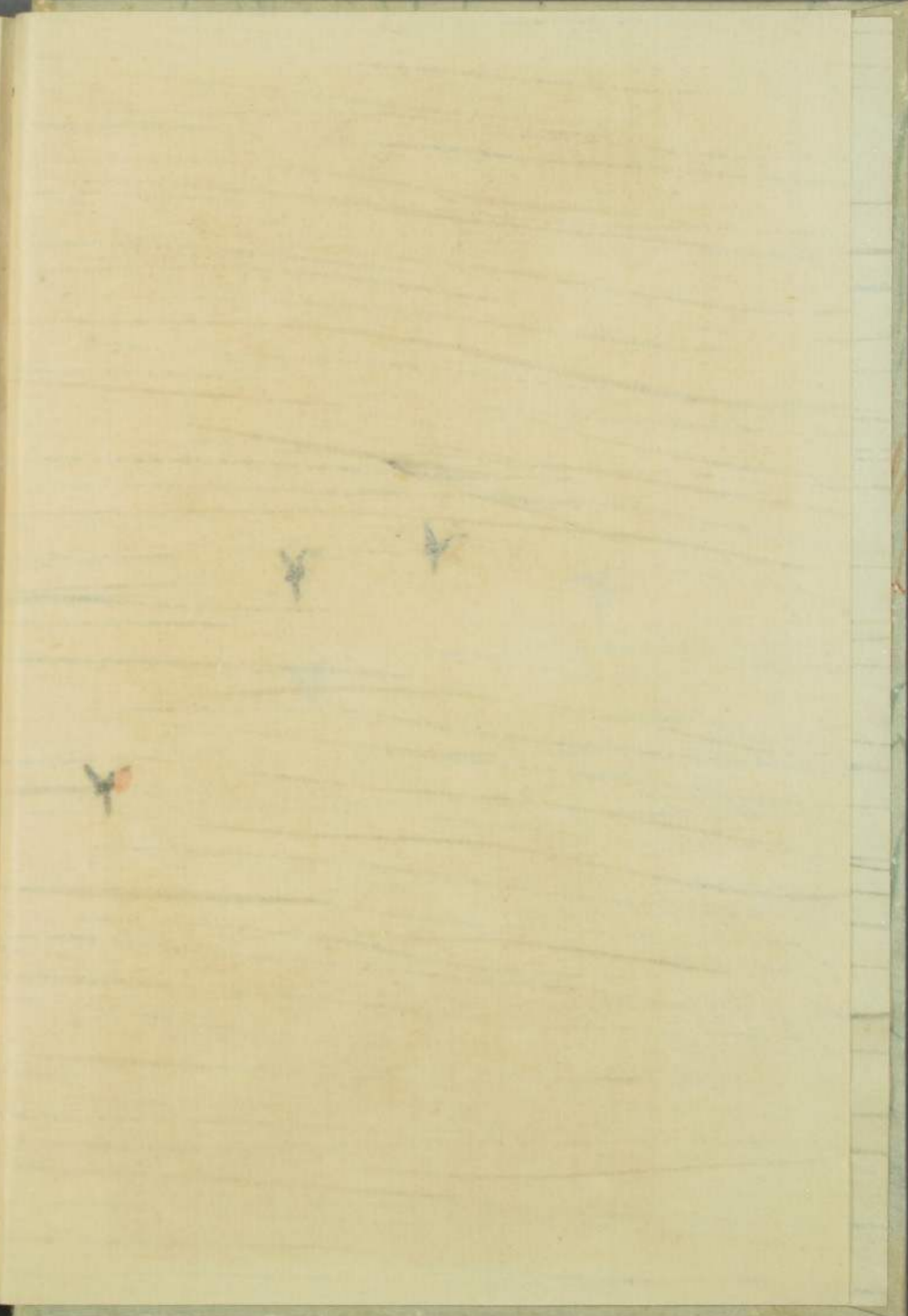






歌集
屋上の土

古泉千柳作





Handwritten text in Chinese characters, including the date 1911 and the name 加張子麟 (Jiāzhāng Zǐlín).

1911年10月
加張子麟



1927
1928
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000

加味牛蒡子

↑
岸

岸す

人い
また

ひりつこよ

なこり

さふーく

海まてり

糸の半

ふきり

人いおた

ます

↑
岸

屋上の土 目次

明治四十一年

郷を出づる歌(十九首)……………一
鐵 橋(八 首)……………八
煙 塵(十四首)……………一一
屋根の草(十一首)……………一六
無一塵庵(五 首)……………二〇
秋 曉(五 首)……………二三

信濃行(十九首)……………三四

秋海棠(二首)……………三一

雜歌(五首)……………三三

雜詠(五首)……………三四

明治四十二年

寒夜(五首)……………三九

畑打(五首)……………四一

海邊の夕暮(八首)……………四三

歸省(八首)……………四六

夕柳雲(五首)……………四九

明治四十三年

合歡の花(八首)……………五三

土(五首)……………五六

夕影(五首)……………五八

祭のあと(五首)……………六〇

雨の道(八首)……………六二

雜歌(八首)……………六五

明治四十四年

曇り日(五首)……………七一

森(五首)……………七三

明治四十五年（大正元年）

春來る頃（五首）	七五
水郷の春（三十二首）	七七
五月露（五首）	八八
睡蓮（五首）	九〇
白帆（八首）	九二
雑歌（十一首）	九五
けむり（十一首）	一〇一
春寒（八首）	一〇五

大正二年

南の山（五首）	一〇八
梅雨晴（五首）	一一〇
夕立の前（八首）	一一二
晩夏（五首）	一一五
富士行（三十五首）	一二七
奈良（十首）	一二九
一夜（十一首）	一三五
雪（五首）	一三九
深夜（八首）	一四二

大正三年

蝸 (五首) 184
 あらしの後(二首) 186
 瘋癲院(八首) 187
 灰 爐(十八首) 190
 板を抱きて(五十七首) 195
 桃の花(七首) 199
 折にふれて(二首) 201
 蜂 (二首) 203
 海 (十七首) 204

まひる(十三首) 190
 獨り寝(八首) 195
 蛙 (八首) 201
 赤電車(八首) 204
 百日咳(十四首) 209
 鷺 (十九首) 211
 梟 (十六首) 219
 風 (二首) 225
 材木堀(八首) 226
 郊外(八首) 229

波の音(十一首)……………二六三

茂吉に寄す(九首)……………二六六

大正五年

朝ゆく道(十一首)……………二四三

夜に入る前(十一首)……………二四七

節一週忌(五首)……………二五一

雨降る(十九首)……………二五三

淡雪(二首)……………二六〇

山びこ(八首)……………二六一

島の桃(十首)……………二六四

五月の朝(八首)……………二六八

紫陽花(八首)……………二七一

死に行く魚(八首)……………二七四

鼠(十一首)……………二七七

あらしの朝(八首)……………二八一

曼珠沙華(八首)……………二八四

深夜の川口(十六首)……………二八七

霜 風(八首)……………二九三

大正六年

兄を伴ひて郷に歸る

夕かげ(十八首)……………二九八

鴨の聲(八首)……………三〇五

明るき空(八首)……………三〇八

午鐘(五首)……………三一一

雨の一日(八首)……………三二五

冬虹(八首)……………三二六

風吹く日(七首)……………三二九

犬の聲(八首)……………三三二

轉居(八首)……………三三五

鬼怒川(十七首)……………三三八

筑波山(十七首)……………三三四

一日(八首)……………三四〇

朴の花(十四首)……………三四三

微恙の後(二首)……………三四八

夕墓原(十四首)……………三四九

左千夫忌(一首)……………三五四

百日紅(八首)……………三五五

梟(八首)……………三五八

朝(七首)……………三六一

蟹(八首)……………三六四

暴風雨の跡(十七首)	………	三六七
牛		
冬 晴(十四首)	………	三七三
夕 渚(五首)	………	三七六
草野原(十二首)	………	三八〇
朝 涼(七首)	………	三八四
白 日(七首)	………	三八七
露 降る(七首)	………	三九〇
時 雨(十四首)	………	三九二
坂の上(二首)	………	三九七

卷末小記……………大熊長次郎

装 幀……………森田恒友

口 繪

著者小照 大正十年三十六歳撮影

手 蹟 大正六年作同十五年筆

郷を出づる歌

阜^{さか}月^{つき}空^{ぞら}あかるき國^{くに}にありかねて吾^{われ}はも去^いなめ
君^{きみ}のかなしも

日の光^{ひのひかり}りいのちもしぬに流^{なが}らふる我家^{わがや}の森^{もり}に
小鳥^{こどり}は啼^なくも

吹く風に椎の若葉の日のひかりうち亂りつつ
ありがてななくに

背戸の森椎の若葉にあさ日てりひとり悲しも
來し方おもへば

あかあかと空はあかるし足もとの黒き地面を
見つめけるかも

椎わか葉にほひ光れりかにかくに吾れ故里を
去るべかりけり

軒かげに大きくさがる蜂の巢のうつくしきだ
に今はさびしも

巢をいでてひとつ飛びたる熊蜂の翅さらさら
と光りゆくかも

青葉照る晝ひるの厩うまやのあかるさに雀來て居り秣槽まぐさたけ
のなかに

4

桑畑のしげみにこもり桑の實のやや熟めるを
ば手につぶしつ

君が目を見まくすべなみ五月野の光のなかに
立ちなげくかも

はだしにてひとり歩めりこの國の露けき地ぢを
いつかまた踏まむ

ただ一人わが立ち聞けば草荊のをとこをみな
の歸りくるこゑ

菖蒲蒼く今日のあさけに家は出づわかき命を
いとほしみつ

5

草鞋はきてまなこをあげぬ古家の軒の菖蒲に
露は光れり

家々にさつき幟のひるがへりしかしてひとり
吾が去りゆくも

ふるさとをかくて吾が去る知るほどの少女が
ともとかくて別るる

みちの上に青葉洩る日のあざやかにわが思ひ
出は悲しきものを

高き木を吹きゆすぶりし風のと下草そよぎ
胸のとよめさ

鐵橋

うちとよむ大きみやこの入口に汽船はしづか
に入りて行くかも

汽船ちかく大き工場見えきたり鐵のほひの
ながれたるかも

たかだかと鐵橋見えてみやこべの大川の口に
船つきにけり

とよみくる都の音のおもおもしはしけの舟に
うつりたり吾れは

船おりてみやこの土を踏みそむるわが足うら
に力のなしも

船にしてわれゑひけらしまひるまの都の土を
ふみつつもとな

ふむ足にこたへあらねば立ちとまり身をとと
のへて息づきにけり

大川の水のおもてを飛ぶつばめ軽きすがたの
まがなしさかも

煙 塵

塵けむるちまたに吾れは奔りさぬ君もかなし
く出でてきたらむ

古里を君もたしかに出でたりと思へるものを
いまだ逢はぬに

相見ねば安からなくに何しつつ君はあるらむ
いまだ逢はぬに

別れゐて喘ぐころの切なさは汝にはわかじ
たよりだにせぬ

今はもよ君をおきてはありえぬをいかにしな
るとも吾れ相あはむ

甕ふかく汲みたる水の垢にごりさびしき戀も
われはするかも

うち日さす都に君も出でこしと思ひさだめて
今日も待つかも

した心君を待ちつつここにしておどまる電車
八十をかぞへぬ

わが待つやとどまる電車一つごとに人吐きゆ
けど似る人もなし

あまりにもおぼろなるかなと思へどもなほし
待たれてせむすべもなし

思ひかね街の辻つじに立ちゐるとか行きかく行き
立ちにけるかも

夕街の小路こうじをひとりいゆきつつまなぶた熱く
涙いで來くも

行き違ひもしもや家に君來しと心さやぎてい
そぎかへりつ

うつしよにおほに従ひへだたりて今し悔くしも
とはのへだたり

屋根の草

あからひく日にむき立てる向日葵ひまわりの悲しかり
とも立ちてを行かな

かりそめの病ひをやみて吾れ思ふつひに都に
住みえざるかに

醫師いしがり行くべきものか夕日さす障子を見つ
つ一人ひとり臥ふるも

しきたへの枕べ訪ひくる人らみななつかしき
かも一人病めれば

青潮に追風うけて走る帆のころは張りつつ
涙ながれぬ

夜のまに雨ふりけらし屋根ぬれて朝明涼しく
秋づきにけり

窓さきの屋根の小草の白き實のひそひそ飛び
て晝の静けさ

おぼろかに三月は過ぎぬ八十國のさほひどよ
めく都べにして

思ひ湧く大き都にせむすべのたどきを知らに
晝寝するかも

爲事もとめ街を行きつつわが室のただに戀し
く歸り來にけり

都大路人満ち行けどみち行く人らいささかも
われにかかはりはなし

無一塵庵

暑き日の夕かたまけて草とると土踏むうれし
この庭にして

よき友にたより吾がせむこの庭の野菊の花は
はや咲きにけり

夕庭に草とり終へて風呂に入りすがしこころ
は都ともなし

ここにして風呂は浴みつつ牛小屋の牛の匂ひ
もわれに親しき

むし熱き市路さまよひなりはひのたづき求む
と日にやけにけり

秋
曉

秋澄める大江の曉あかつきの遠つ國原に鶏の
かそけく

ゆく水に夜はながれて江の尻ゆあかつきの光
さやにおこれり

曉はやく大江のふちの露ふみてこの國人ら通
るこゑすも

滑かに黙もくに押しゆく大川のやまぬ流れに遠き
世をおもふ

うつそみの水と流るる吾がこころ大川のべに
行方知らずも

信濃行

富士見高原

わが來つる富士見高原秋ふかみ千草奇しくも
寂びにけるかも

ここにして飛彈のむら山たかだかにしろがね
の雪かがやけり見ゆ

西方に飛彈の高山あかあかと夕べの空に浮び
たるかも

おごそかに裳裾遠ひく八つが根のむらさき深
く夜に入りにけり

富士見根の有明月夜さうさうと瀬の音は遠く
ひびきくるかも

蓼科山巖温泉

山の湯のともし火見ゆれあらかじめ待たるる
ごとく心はをどる

湯の宿のともし見え來し安まりにふりかへり
見つ夜山八重山

ぬばたまの夜の色ふかくたたなはる群山が上
を風とよもすも

湯の香匂ふ縁えんにいづれば夜の山を提灯ていとうのぼり
來友くにしあるらし

夜の山をひとりのぼりて今し來しこのわが友
は雪袴はけり

のぼり来る灯かげうれしくわが友の雪袴見ゆ
その雪ばかま

年久に思ひ戀ひにし蓼科の山のいでゆに今あ
みにけり

大地の遠代の底ゆ湧きいづる靈湯あみをり星
空に満つ

わがからだあふれながる瀧の湯のひびき現
しく夜はふけぬらし

蓼科の山の夜の湯にあみ居れば遠くひびかふ
湯の川の音

ふかぶかと明けの光をたたへぬるこれのいで
湯にひとり入りなむ

湯はしづかに満ちこぼれ居りひたりゐるわれ
のからだのすきとほり見ゆ

おのづから満ちあふれをるいで湯のなか岩に
枕さわが身親しも

あさぼらけいでゆをいでて秋ふかき蓼科山の
草ふみゆくも

秋海棠

清澄山の谿谷をおもふ

杉村のあはひ洩る日のほがらかに秋海棠の花
露にぬれたり

河鹿鳴く聲はいづらやおもむろに秋海棠の花
川にうつり見ゆ

雑歌

あかときのみさ霧の庭におぼろかに桔梗のはな
眼に入りきたる

向つ尾の杉の木ぬれを吹きし風庭草の花に落
ちてそよげり

ふるさとの秋ふかみかも柿赤き山べ川のべわ
が眼には見ゆ

秋日和留守居たのしく柿の木にいくたび吾れ
はのぼりけらしも

さ夜ふかみ澄み渡る空の月に向ひ今更に思ふ
ひとりあることを

雑詠

いささかの明地あきちによりて風かぜあぐる子こらなつか
しむ今を忘れて

打日うさす都みやこの土つちを踏ふみそめてとよみしころ
いつか消きにつつ

霜しもけぶる谿間たにまの月つきの下したとほみ燈見ともしみえ來きしわが
入いらむ里さと

もやもやし大野おほののみどり色いろに立たち黄きなるが中なか
に日ひの沈しずむ見みゆ

ひとり身みの心こころそぞろに思おもひ立たちこの夜よ梅うめ煮にる
さ夜よふけにつつ

明治四十二年

寒
夜

ぬば玉の夜の厩に母がゆけば提灯を提げて吾
もゆきにけり

提灯に手をかざしつつませの上ゆ首出す牛の
まなこを見をり

夜おそく酔ひて歸らす父うへのなほしかすが
に牛のこと問ふ

父うへの歸りおそきに父上の酒の上いひて母
はなげかす

ゐろりの火赤く燃ゆれど母も吾も黙に入りが
ちにさ夜ふけにけり

畑
打

山かげに畑打つ人に心うごき都かなしく吾な
りにけり

夕山に來ゐる白雲安らけく汝が居るみればふ
る里おもほゆ

森のかけおほに暮れしを畑打ちや手もと小ぐ
らくなほ畑を打つ

畑打ちをともしみ居つつ暮れのこる山の日影
に心いざよふ

畑打のおほに入りにし森のうちに灯現しく夜
になりけり

海邊の夕暮

宵くらき砂丘のかけに一人居り海のひびきの
はるけくよしも

ただひとりこの夕濱の砂にゐて砂のぬくもり
を手にもてあそぶ

おのづからあはれになりて夕濱の石に靜かに
身をふせにけり

軟かにわがほに吹けり月白つきしろのにほひただよふ
海の上の風

海は暮れて西少し明かく遠長き砂濱おほに浪
寄する見ゆ

宵闇み踵返せば來し方の濱びに赤く火が燃ゆ
る見ゆ

焚火する海人あまらがむれにこの日頃面知りそめ
し海人も交れり

あかあかと燃ゆる焚火に手をかざし安き心に
吾がなりにけり

歸省

ま晝のあかるき村を歸るにもためらはれぬる
胸のさびしみ

歸りきて坂に我が見るわが家はまだ灯もささ
ず日は暮れたるに

いましがた田ゆ歸りしと軒間の母が立たすに
我が胸せまる

たそがるる向ひの田道牛ひきて父にしあらし
今歸ります

村人ら植付前のいそがしくはたらくらしもわ
が父母も

かぎろひの日も暮れたらば町のあたり出でて
見まくとひとり思ひつつ

椎櫂檜の大樹に月おしてり陰おほき庭かなし
かりけり

大庭の月夜木の暮影ふかみひとり下りたち物
思ふ吾れを

夕 棚 雲

吾からと別れを強ひし心もてなにに寝らえぬ
夜半のこほろぎ

ひそひそとなくや蟋蟀こほろぎひそかにはわが鏡心とこころは
にぶりはてしも

さ夜ふかくなくやこほろぎ心ぐし人もひそか
にひとり居るらし

玉くしげふたたびあはばをの子わが正名はあ
らじあらずともよし

かぎろひの夕棚雲の心ながくながく待つべみ
君のいひしを

明治四十三年

合歡の花

川隈の稚の木かげの合歡あひこの花にほひさゆらぐ
上げ潮の風に

たもとほる夕川のべの合歡の花その葉は今ほ
ねむれるらしも

夕風にねむのきの花さゆれつつ待つ間まがな
しころそぞろに

夕川を上げ潮の香のかなしきに心はもとな君
がおそきに

ねむの花匂ふ川びの夕あかり足音あしなつつましく
あゆみ來らしも

うつぶしに歩み來につつたまゆらに吾れわれに向
けつるかがやく目見まを

夕あかり合歡の匂ひのあなにやしわれに立ち
添ふ妹がすがたを

かくしつつすべなきものかねむの花のしなひ
匂へる手をとりにつつ

土

雨ひと日春あたたかみいち早も水は止むると
堅田畔塗る

雨あがり春日てるなべなま畔のつやつや光り
陽炎の立つ

小山田の畔塗りしかば畔のべの水のにごりに
春くぐもれり

夕かけて麥まきをはり畑裾に立ちてながむる
その夕畑を

わが父もながめ居るらし麥蒔きて土あらたな
る畑の上の月

夕影

夕早く歸るべかりしを既に馬は人待ち飼葉
もあらず

刈草のはつか残れるうまや戸に夕日片さし蠅
二つ三つ

宵草を刈りおくべみとちり立ちて鎌とぐから
に心はすがしも

暮るる野の草はらの上にひとところ日影映り
居り野は沈みゆく

かぎろひの夕露しづむ野にひとりあくがれ心
われ草を刈る

祭のあと

祭あとの物のちらばり目に立てる疊のうへに
秋の日のさす

祭すぎて窓の障子のあかるさに蠅も目につく
今日のさびしさ

おのづから野を思ふところ祭すぎて野に出づ
る道の曼珠沙華の花

祭あとの物のをさめにをみならは猶のこり居
り一人野に出づ

秋はれの野にいそしむと吾が心いまだ落ち居
ず祭の疲れに

雨の道

五月初め諸友と鹿野山に遊び山上より歸途一人別れて故郷に入る

山の上の青草原に雲脚の暗みあかるみふりいでにけり

相さかる友を見かへり立ち居るに耳に入りくも草野雨の音

ふり來ぬと仰ぎ見すればこの山の木ぬれ明るく雨の脚見ゆ

ふるさとの青葉若葉にふる雨にぬれつつ行かく涙甘しも

山々は萌黄あかるく雨けぶり下り坂路のここは小暗さ

ふる雨に木々の青葉のうちゆるるこの山坂を
ひとり下りゆく

木莓のいまだ青きをまがなしみ噛みてぞ見つ
る雨の山路に

雨けぶる山路下りきてこの里に小田すく牛を
見れば悲しも

雑歌

餅搗くと大きかまどに焚きつくる楷火は匂ふ
このあかときを

八日つき飯こしきかはりめを外に立てば霜いちじろ
く夜は明けにけり

みよりべに妻と二人し行くみちに心あやしく
我家こひしき

秋の日のひかり黄色に泌み照れる淺茅が原に
こほろぎのこゑ

晝の野になくやこほろぎほろほろに父母の手
にすがらまくすも

世に背くかなし戀ゆゑこもりのみなげきすぎ
なむ吾れが一生は

風にさわぐ庭の落葉のわがころものに散り
つつ吾れに添はずも

植込の木の霜しづれ日のよきに心をなごみ今
日し家居り

明治四十四年

曇り日

冬沈みものかなしき曇り街をたづたづ來れ
ば川びに出でぬ

さびさびと曇いや沈む川の面をかすかに動く
白さあかるみ

うち沈み曇りほうけし吾が前ををりをり行き
すぐる人の面かも

おぼほしく曇ゆらぎて水の上にくすら日させ
り向岸のへに

午^{ひる}ちかみ日ざしたただよふ冬川のみなぞこおほ
に明^{あか}りぬる見ゆ

森

この悲しくいさどほろしきわが心この森の深
く今日も來れり

この静けき森の奥がをさわさわに吹き過ぐる
風の行方知らずも

吾が一人ここにありつつ物思ひのかなしき胸
に木の實落つる音

うつそみの悲しき罪に死ぬといへど死ぬとい
ふことのただにしあらめや

湛へゐる森の泉にひとひらの木の葉のながれ
見すぐしかねつ

春來る頃

いとどしき夜の雨はれてこのあした海邊のど
かに春立つらしも

みんなみの岬をめぐる潮筋のいちじろくして
春はきたれり

いち早く春を揺りくる黒潮よこのみんなみを
とほにながるる

みんなみへつらなる八島朝日てり遙^{はろ}けきかも
よここに吾が立つ

けさの海みちかがよへりしかすがにかの巖か
げは暗く寒けし

水郷の春

汽車おりて土ふむ吾れにうち浴ぶす春の光は
ながるるごとし

雨あがり春の野みちを踏みて行く草鞋のそこ
のしめりくるかも

春日てる野をたどりきつ蒼杉あさぎのかけしなつか
し心もしぬに

春の日のひろら照る野をかぎり立つこれの森
かけ李すももはな咲けり

湖うみの面の浮きしてみだるるかがやきにものごこ
ろよくうれへおぼゆる

春まひる日のかげろひに湖うみの面はくろく沈み
ぬそのひとときを

かぎろひの西日さららぐ湖の面の沖べは暗く
おほにこもれり

夕高き鳥居をいでてうつしきにふりかへり見
る森の暗さを

かへり見る鳥居の奥の夕がすみ木ぬれの空は
いまだあかるし

ゆふがすみうすくつつめるこの丘の社の町に
灯はともりたり

よるづみな闇にただよふ春の夜のま底に深く
湖はしづめり

宵ふくる春の静夜をやはらかく長く揺りつつ
湖はうごくも

室内こゝろのともし明るし酒くまむよき子もほしも
旅のところに

相ともに唄のひとつをうたひえぬ心さびしく
酒のみにけり

春の夜の湖べ俄かにさわめきてあらしとなり
ぬ揺らぐともし火

湖のべのこよひのやどりともしきに春神鳴の
なりわたるなり

われひとり障子のそとに春の雷はためく夜空
立ち見つるかも

春の雷いみじく鳴りてすぎしあと暗き湖べに
われひとり立つ

あらし過ぎて闇おぼほしき春の夜の渚の水に
わが手をひたす

春の夜のあらしは止みぬ水の上の鳥居の雫落
ちてひびくも

流らふる明けのひかりに春の湖水あたらしく
満ちあふれ見ゆ

朝早み舟こぎいづれ湖かくむ春の國べはいま
だしづけし

朝あけの光ただよふ湖のうへわが漕ぐ舟の櫓
の音ひびくも

ひむがしの野を出づる日のあかねさしかそけ
くそよぐ湖の上の風

舟あがりてくるわの裏の畑路のそら豆のはな
手につみにけり

豆の葉に春日ながらふしかすがに晝のくるわ
にわれら入りにき

春の日のひかりまどろむ小川には家鴨ならび
て泳ぎてありけり

古りにたる水のあがたのくるわ町くるわ寂し
も春日は高く

あくり來し遊女のすがた春の日のながらふな
かになしかりけり

小さき橋いくつくぐりて見かへればそら豆の
畑を遊女ゆく見ゆ

水郷の沖べはるかにかぎろひて大き夕日の沈
み行く見ゆ

くるわの灯ほのにもれり堤つくる工夫のむ
れはなほ働けり

五月 露

阜月露かをれる朝の戀どころおのづから思ふ
君があたりを

軒にさす菖蒲の葉さき露ひかり朝戸くる君が
すがたしおもほゆ

阜月露ながらふ縁に吾にそひて立ちしおもか
げ忘れかねつも

朝露の匂ひただよふ池のべを水鶏の雛の二つ
居り見ゆ

うつしわが過ぎ來し方の暗ければ少女がとも
を見らく悲しも

睡蓮

ぬばたまの夜ふかき水にあはあはし白く浮き
咲く睡蓮の花

ぬば玉の夜を深ければやすらかに花はひらく
も手に觸りかねつ

するれんの瑞若花をともしめど吾が心さびし
くへだたれるかも

池のべの青葉の雫かそかなるひびきともしも
明けちかからし

ふく風にさざ波ゆるれば浮き匂ふ花もさゆら
ぐともしさを夜風

白帆

ここに來てふるさとちかし秋晴の稻田の上に
青海せまれる

東の海ひかる白帆にただに會ひて幼な吾が影
おもほゆるかも

青海の海境遠くひかるもの船のしら帆と知り
にき吾れは

青海を光る白帆をあやしみて日まねくも吾は
岡にのぼりし

あのころの吾れをしぬべばおのづから涙ぐま
しも光る白帆を

妹が家のうしろに高さ柿の木にあがれば遠く
青海見えし

かぎろひの夕日うしろに暮るる海のかげ暗し
もよ邊波沖波

目の前をいま行きすぎる船の帆の暗く寂しく
日は暮れにけり

雑歌

冬日和野の墓原の赤土の濕りともしみわがた
もとほる

石ひくくならべる墓に冬日てりひとつひとつ
親しく思ほゆ

朝日てるひんがしの野をわが来れば春の満ち
潮道にあふるる

春の雪日にしづれつつ竹河岸の竹のみどりの
濡れ光り見ゆ

雨あがり春あたたかき朝の大路ぬかれる泥の
日に光るかな

道を行く影もかなしくひと日ひと日うなる離
れの目に立ちにけり

さみだれの雨ふる街のぬかるみをずぶ濡れに
つついづこへ行かむ

日にひかり木々の青葉のゆるる野のはたての
空よむくわく白雲

日の光あみて歸りつ室ぬちにこもるしめりを
ともしみにけり

わが弟もわれが如くにふる里をつひに出でさ
つ父ははをおきて

われらあらぬ廣きふる家を守りいます父はは
あはれわれらあらぬを

明治四十五年(大正元年)

けむり

霜晴のあさあけのひかり窓ふかくへやの障子
に白く顛へり

朝呀えのあかるき室に目さめつつ青き壘をと
もしみにけり

郊外にひと夜ねむりて歸りつつひえびえと露
の草ふみにけり

靄晴れて朝日かがよふ高き木にちり残る葉の
しづかに揺れ居り

小春日の林を入れれば落葉焚くにほひ沁みくも
けむりは見えぬ

落葉して深くあかるきこの山び雉子は來つ
つ砂浴ぶらしも

ものなべて忘れしごとき小春日の光のなかに
息づきにけり

ほろびゆく草木さながらあたたかき秋の光に
かがやけるかな

夕暮の街にただよふ物の音をさきわけにつつ
かなしみわくも

ともし火のかがよふ夜のまぼろしに吾をあざ
むきてありがてなくに

明日は明日は別れなむとぞ思ひつつ夜々を疲
れてねむり入るかも

春
寒

その夫をまこと別れたるか彼の森の家に歸り
てひとりにて居るか

ゆくりなく吾が胸いたし今にして別れたるら
し子どももなくて

子をいだく白き胸乳の母ぶりを思ひうかべつ
われはありしか

山茶花の葉かげの花よわれゆゑにあるひは人
の別れけらずや

わがもとにただに馳せさて嘆くかになしき
面わ見えつつもとな

うつし世に命まさきくありこそとひそかにわ
れは思ひてありしか

逢ふべくはありもあらずもまがなしき人は獨
となりけらしも

まがなしき人のたよりをきけるかもこの夕空
の白梅の花

南の山

あたたかに焼野の土をもたげゐるさむらびの
芽のなつかしきかも

さわらびはいまだのびねば篋もちて土ふかく
堀る山のやけ野に

うすじめりかわきゆく野にわらび芽ぐむ土の
ふくれのわれつつ小さく

草萌えてあかるき山の石の上にわれも休めり
妹もやすめり

足袋につき焼野の土の灰白はひしろにかわきゆくころ
のうらがなしかり

梅雨晴

梅雨雲は空にみちうごき濁り水あふれながる
る岸べにわが立つ

にぎり河の岸の小笹に押しならびつばくらの
子は鳴きて居にけり

葛の蔓ふとぶとと延びて若笹にまとはりつく
をほどさても見る

朝晴の濡れたる土にわがかげの映り行くをば
かへり見にけり

わが足音うれしみ行けば若葉かげをとめの歩
む音のきこゆも

夕立の前

古倉の壁のくづれに日のひかり白く燃えつつ
動くものもなし

汗ばみて疊にのべしわが足に蜻蛉がひとつ來
てをとまれる

とんぼうのうすき羽おさへもづもづと動かす
足をつつきて居たり

門さきの椎の大木のかげ暗く日かげうすれて
雲たちわたる

空くらく雲たちぬればあはれなる池の緋鯉は
あらはれにけり

ごうとして風落ちきたりゆすぶれば椎の大樹
のゑらぎどよめる

緋鯉浮く池のおもてにしろがねの雨いち早く
落ちて來にけり

吹く風に葉裏ゆするる椎のかけのますます暗
くなりてくるかも

晩 夏

街の上まちにうすき埃ほこりのほひ立ちて明けはなれ
ゆく今日けふのかなしさ

汗あえて起きいでぬれば朝ながら赤くあざれ
し日のすさまじさ

湯氣^{ゆけ}い吹く飯^{いひ}の匂ひもいとほしくいのちに倦
みぬ夏かたまけて

街の上のゆゆしきひかり刺^さのごと身ぬちにい
たしへやに居れども

あまづたふま日に倦みたる向日葵^{ひまわり}のけおもき
いのちいづべに向かむ

富士行

夏の夜の夜ふかき街を立ち出づるわが旅姿な
つかしきかな

宵ふけし銀座どぼりの灯^{あかり}のかげを蓑笠^{かさ}つけて
あゆみゆくかな

冷えびえとさ霧しみふる停車場にわが下り立
ちぬ曉は遠かり

町離れいまだ夜ぶかき裾野べの濃霧のなかに
入りて行くかも

提灯の小さきあかりにしみみ降る霧の匂ひも
身をそそりつつ

裾野べのこのしのめの水ぐるまことりこと
りとめぐりてゐるも

焦砂にそぼそぼとしてさ霧ふり裾野の夜らは
いまだ明けずも

ともし火を消してあゆめば明け近み白く大き
く霧うごく見ゆ

裾野べのやけ砂みちの落の葉の青さひろ葉に
曉あけぼのの霧ふる

霧はるる木立のうへにうす藍の富士は大きく
夜はあけにけり

山頂にたなびく雲のひとひらは垂氷たなびのごとく
かかりてあるかも

富士の嶺を離りし霧片よりに大戸をなして
そばだてりけり

太陽はすでにたかけれ灰ぐるく片よれる霧の
うごかざるかも

焦砂にしとどまぶれしわが足に照りつくる日
の痛くしもよし

山肌にふもとの森にきはやかに夕日の色のな
がれたるかな

夕の色にはかにせまるすそ原や荷ぐるまのち
と遠くきこゆる

明日のぼる富士の高嶺を仰ぎつつ裾野の湖に
舟こぎあそぶ

仰ぎ見る富士のいただきを一ひらの雲めぐり
つつ離れざりけり

明日の日の山晴るるらしおのづから心つつま
しく仰ぎ見るかも

裾原ゆ湧ける夕雲しづしづと大き富士の嶺お
ほひ行くかも

宵ふかみ外^さをうかがへばしらしらと静かに雨
の降りゐたりけり

窓ちかき富士のたか嶺は直肌^{ひだ}にこの夜の雨に
濡れ立てるらし

富士が嶺を深くつつめる雨雲ゆ雨はふるらし
この夜しづかに

山上はしづかならむと雨ながらのぼりゆくか
もこのあさあけを

から松の若葉のみどり露ひかり行手あかるく
雨はれんとす

赤松のすくすく立てるなつかしさ靄を透して
あさ日にほへり

なめらけき赤松の幹の吐く息のしづかに胸に
つたひくるかな

匂はしく赤松立てりこの朝の登山のころな
ごみ來らしも

馬の上にわが見はるかす裾野原靄は晴れつつ
朝日ながらふ

雨晴れし青草原にあさ日てり友が簑笠の白く
目に泌む

まつはれる雲切れゆきて山頂の輪郭くるく見
えにけるかも

ないそぎそお山は静かなりといふ下山の人の
言のしたしも

むらさきの夕かげふかき富士が嶺の直山^{ひた}膚^{やま}を
わがのぼり居り

七合目の室^{むろ}のあかりを見すごしてなほのぼり
行く暮れたる富士を

あかときの星かがやきてくろぐると富士のい
ただき目の上に見ゆ

奈 良

法隆寺を出でて

わが國の遠^{とほ}つみ祖^{むら}の生きの光りいまおごそか
にうつつなさかも

班鳩^{ばんこう}のみ寺をろがみ吾がいのちまことしづか
に匂ふなりけり

み寺出でてあな尊たまと吾が眼にあかあかと静かに燃ゆる焰ほのほこそ見けれ

あかあかと焰燃え居り遠つ祖の生きの焰のじつと燃え居り

いかるがの眞晝あかるく焰澄ほのほすみいのちひとすぢに燃えたてりけり

岡の上

杉山の杉の穂ぬれのやはらかに青空の光りそそぐなりけり

青空の奥へつづける杉林木ぬれかすかにけぶりまき澱める

八千矛の若杉の穂のいちやうにみ空の青にな
ごみ匂へる

ひとつびとつの命こそ溶^とくれ杉林遠くまどか
に日の光り満つ

あざやかに光り湛へる林の上いのち弾^{はじ}かれて
鳥舞へりけり

大正二年

一
夜

ひさびさにわが歸りきてふる里の秋のあらし
に遇ひにけるかも

あらしに搖るる大き古家に宵早く酔ひて眠れ
る父のかなしさ

夜の空のうすらに赤きあらしのなかこの古家
の揺れやまざけり

あらしの夜をこの大きな家に親と子とはなれば
なれに早く寝にけり

かくのごとあらし吹く夜はひたぶるに父によ
りそひいねにけるかも

あらしどよもすこのふる里の夜の床に白きた
だむさわが思はめや

うちどよむあらしの底にこほろぎは鳴きてあ
りけりとぎれとぎれに

この夜らをなくやこほろぎはつ戀の年うへの
子のかなしかるかな

やや間遠くなれる嵐に外さきに立てば今入りがた
の月の色赤し

ひとりの心堪へがたし月赤く惱みながらに落
ちて行くなり

入りがたの月のひかりに壁の色ほのかに赤く
こほろぎ鳴くも

雪

街の灯の照りそめぬればいちじろく屋根には
雪のつもりたり見ゆ

このゆふべ雪ふる街のともし火のみづみづと
してありがたてなくに

逢はなくて今はひさしきかなし子をこの夜の
雪におもほゆるかも

今宵はやしづかに雪のつもるらむ逢ひぬれば
心やすけかるかな

雪の夜のこのひそか家の怖ぢごころあやにな
つかし雪はつもらな

深
夜

夏の夜はいたく更けぬれ惨としてももの匂ひ
の湧きくるかなや

さ夜ふかく匂ひ湧きたつ池の魚の生きのいの
ちのかなしかりけり

池の魚の生きのにほひの焰ほのほだちこの夜の空の
更けがたさかも

生きむとする匂ひまがなしわが眼には蒼海遠
く展ひらけくる見ゆ

まなぞこに深夜しんやの海の蒼波あゐなみの遠ひかりつつ寄
せきたる見ゆ

街の夜は更け爛れたりしかすがに庭の青葉の
露にしめれる

わが庭の眞上まへわづかに空青み露はあきたり夜よ
の草木に

深き夜の庭の青葉のひややかさわれと悲しく
顔觸りにけり

蝸

雨あがりの街の夕日の赤ければかなかなは鳴
くわが庭の樹に

わが庭にかなかな鳴けり今われはなれなれし
く人を思ひ居りにし

相見ねば汝が來し方のかなしきをねたましく
さへ思へるものを

一つ來て鳴きし蝸うらがなしいづべに去りし
街の夕日に

ほろほろと鳳仙花赤く散りにけりなほおほよ
そに遠く戀ひ居り

あらしの後

あらしのあと木の葉の青の揉まれたる匂ひか
なしも空は晴れつつ

あらしあめ晴れてすがしきこの朝や青栗の香
のあまき匂ひす

瘋癲院

狂女ひとり風呂に入り居り黄色わかしきの浴衣まといまとひ
て静けさものを

ものぐるひの若さをみなご湯につかり静かに
飯いひを強ひられにけり

狂女は湯につかりつつ飯たべてひと口たべて
否といひにけり

窓赤く夕日さしたりぬるま湯に狂女ひたりて
幾ときならむ

瘋癲院の夕ぐれ早みさちがひらおのおの暗き
臥所に入るも

夕あかりうすら匂へる病室にならびねて居る
狂人の顔

床の上に三味線ひける狂人の容顔くらく夕さ
りにけり

二三人女さちがひ起きてきてしきりに吾れに
話しかくるも

灰 燼

急ぎきて人だらしげさわが門にかがやく目見
をふと見づるかも

うちかぶさる灰燼のなかにわが家は小さく残
りてあかりつきたり

夕闇に焼けのこりたるわが屋根にりうりうと
水は流れけらずや

わが門をひとり入りくらし今し見し悲しさ目見
の思ほゆらくに

灰燼の暗くなびかふ夕庭にたどきも知らに相
見づるかも

はるばると吾れにきたれる悲し子を今ここに
してすべもすべなく

夕くらく灰燼にほふわが庭にはじめて逢ひし
二人なるかも

うらさわぐ灰燼のなか相寄ればくる髪の香の
何ぞかなしき

ひたぶるに家人は物をしまひ居りかなしき人
は歸りけるかも

放り出せし一切のもの又をさめ焼けざりし家
に眠るなりけり

*

湯を出でて夜の廊下のつめたきにふと胸さわ
ぐ君をひとり置きて

夜の海の暗さを見つつ君居たり一人し居りて
何をか思ひし

闇の海に赤き火一つおぼつかないひとりし君を
おきにけるかも

さ夜ふかみ小床になびく黒髪をわがおよびに
し捲きてかなしも

燭の火をさよき指をさびにおほひつつ人はゑみけり
その束の間を

夜は深し燭を續ぐとて起きし子のほのかに冷
えし肌のかなしさ

うつつなく眠るおもわも見むものを相嘆きつ
つ一夜明けにけり

朝なればさやらさやらに君が帯結ぶひびきの
かなしかりけり

大正三年

柩を抱きて

日のひかり曇りて白し走れどもひた走れども
わが路白し

この街のにぶき光りの動かざれば心は負けて
ひた走りたり

またたくまかなしきをんな思ひけり心慄^{おの}きて
ひた走りけり

いちめん^まに白き光りの喘^{あせ}ぎ立ち眼^{まなこ}あぐれば倒
れんとすも

ひた走り街をかへればわが家は息をひそめて
静かなるかも

ふるさとに久^{ひさ}にてかへるかなし兒の柩^{ひつぎ}いださ
て今はも歸る

ぬばたまの夜の海走る船の上に白きひつぎを
いだきわが居り

しみじみとはじめて吾子をいだきたり亡きが
らを今しみじみ抱^{いだ}きたり

わが膝に今はいだけどたまきはる分けし命は
ほろびけるかも

うつせみの吾れをかなしみ汝が有るを汝が啼
く聲を憎みしは誰そ

をんなに我が逢ひし時かなし子のたらちねの
母の乳は涸れにけり

きはまれる生きの力をうつたへていとけき斷
噛みにけるかも

たまゆらに眠りに入りし病める兒の火照る頬
にこそ口觸りにけり

うす黄なる夜船の明り見居りしか吾れは今考
へざるべからず

夜の船に柩いだきてうつらうつら我がせしか
もよ赤兒啼き啼く

夜の海を船は走れりこのままに亡き吾子いだ
きて遠く行かむを

光りつつたちまち消えし流れ星あかつきの海
はいまだ暗しも

ふるさとの小舟に下りつひえびえと朝明あさあけの
海の香湧かきみなざれり

風出づとかねて思ほえ曉あけの海をつとうねる波
のかなしき光

山の上に朝あけの光ひらめけりよみがへり來
る命をおもふ

抱きゆく小さき柩にふるさとの朝日ほのぼの
と流らふるなり

車の上に柩をひしと抱きけりわが家の森黒く
光り見ゆ

しんかんとまひる明るき古家ぬち小さき柩は
今おかれたり

ふるさとにわが一族にいま逢へる汝が死顔の
いまだうつくしも

常磐木に冬日あたたかに小鳥なくわが故郷ぞ
安く眠らな

山桃の暗緑の木ぬれ流らふる光りかなしき墓
に立ちけり

祖先の墓にひとり櫛をささげつつ涙ながして
我が居たりけり

黄いろなる水仙の花あまた咲きそよりと風は
吹きすぎにけり

ふるさとの日光ひかりのなかひやりひやり水仙の葉
を踏みて居りけり

水仙の薫りのなかに眼をあけばめんめんと冬
の日のふりそそぐ

たけたかさ棕櫚の木かげは水仙の青さが上に
うつりてゐたり

紅椿か黒さびたれ手にとれば葎の根白くかな
しきものを

大きな土手の斜面に目を浴びてひとりつく
づくともたりけるかも

杉林暗さがなかにひた坐りこらへかねたる涙
なるかも

つつましくひとり野を來つ露の藁袂に入れて
歸るなりけり

ふりそそぐ冬の日光やはらかに小川の水は流
るるものを

すかんぼのうす赤き莖のかなしけれ手には摘
みつつ我が噛みがてに

すかんぼの莖をしきりに折りゐしが胸さわぎ
していそぎ歸れり

椿葉のかぐる厚葉あつはの日の光り眞赤の花がこぼれんとすも

つつましく寂しきころ厩うまやより牛ひき出でて庭につなげり

牛の子のまだいとけなき短せまか角つるひそかに撫なでて寂しきものを

黄に明るき晝の厩うまやに乾草かきのほひかなしみ乾草を切る

太陽は凝りかがやきて廻りたり二頭の牛はぢつと動かず

かなし兒は祖先の墓のかたはらにかなしかれども眠らせにけり

中空に澄みきはまれる日の赤き我が子を土に
葬りはてけり

今はもよ小さき柩のなくなりし家ぬちに來て
ひとりすわれる

つばくらの古巢は白く寂しきを風はほのかに
光りてゆけり

椿葉に曉の光りはながれたり吾が去る國はい
まだ静けし

傷を負ひて暗深くうめぐけだもの心を感じ
ひた土に臥す

この土のくぐもる力わが肉に脈うつかもよ徒
にせじ汝が死を

すやすやに眠れるおもをのぞき見つつ乳汁ちじの
にほひ悲しかりけり

たらちねの母の乳汁のほひ染みやうやく堅
くふとりけるかも

くりくりと澄める瞳を圍かこむもの吾れをしたし
く映しけらずや

亡き兒あはれいつも素直すなほに寝なざめては眼まなこつぶ
らにひとり語りし

亡き吾兒わがこの姉の手をとりたままたまに冬晴の街
をわが歩みけり

冬の光りおだやかにして吾兒が歩む下駄の音
軽くこまかにひびく

吾兒が踏む下駄の音かるし手を離し先きに立
たせて歩ませて見つ

桃の花

桃の花遠こほに照る野に一人立ちいまは悲しも安
く逢はなかに

桃の花下照る水のさざれ波ややねたましきこ
ころのみだれ

うつとりと桃のくれなる水底みなに映りて吾れは
涙ながせり

との曇る春の曇りに桃のはな遠くれなるの沈
みたる見ゆ

桃の花くれなる曇りにほやかに寂しめる子の
肌のかなしき

挑の花曇りの底にさにづらひわれのころの
あせりてもとな

桃の花くれなる沈むしかすがにをとめのごと
き女なりけり

折にふれて

嵐のなかにひとり覺めをり病める兒の入院の
ことを思ひわが居り

いつせいに心いらちて鳴く蛙われの懶惰らんだの血
のなやましさを

蜂

たたなづく稚柔ちじろ乳ちちのほのぬくみかなしきかも
よみごもりぬらし

飛ぶ蜂のつばささらめく朝の庭たまゆら妻の
はればれしけれ

海

とどろ波かがやき寄する渚べに大きな牛黙
して立てり

川口にせまりかがやくあぶら波音をひそむる
晝のさびしさ

川中に大きな牛立てり外海の油青波かがやき止
まず

ま夏日のかがやく青波やしほ波さもむかふ吾
が心のいたさ

あざろなき海の光りにひた向ひいままはだか
に吾が立てるなり

たかだかにかがやく青波ここに居るわれの命
を亂せあらたに

ふるさとの海に浸れり青海のかがやく海にじ
つと浸れり

たまきはるいのちうれしくもろ手あげうねり
來る波抜きて泳げり

たかだかに寄せくる波を待ちゐつつうねりに
乗りてゆくところかな

素肌なるわが廣胸ひろむねをたか波のうねりに乗せて
ゆくところかな

海底に眼をばひらきつ翹たかいろのうしほの光り
吾れをつつめり

海底のうしほに浸る吾がからだ息のかぎりを
うごかざるかな

ひたひたに波に唇觸り仰むきて遠き雲の根ゆ
るぐを見るも

海にゐて額に指するやさしさをせちに感ずる
うましき疲れを

しみじみとまひるの海にひたりつつ身はやは
らかにうち揺られ居り

玉藻なすか寄りかくよりうつとりと肌は揉ま
れつ青さうしほに

澄みとほる海にひたりて潮ながらとこぶし食
めり岩をかきかき

まひる

ごくねつの眞晝の街をうな垂れてしかもひも
じく歸るなりけり

夏まひるちまたを行くもくろぐろと喘ぐいの
ちをいたはり行くも

夏の日のま白さまひるちまた行き行き歩みつ
つ眼をつぶるなる

ひと吹き風の風ふさしかばわれ知らにかうべを
あげぬ空のまばゆき

をののきて仰ぎこそ見れ街中の眞夏眞晝の日
の光りかも

まかがやく天日は凝りてじりじりと肩の首根
の焼くるなりけり

風去にてしんと沈める晝の街かたき地上にわ
がかげ小さし

ほこりまみれし足袋の寂しさ水撒きて上ぬか
りせる道を踏み行く

しほはゆき汗ながしつつちまた行くこの残虐
のころよし今は

目ざかりをあゆみ歸ればわが門べ道堀りかへ
し工夫らの居り

大川

大川に夕^{ゆふ}みち潮のかげふかくひかりふくれて
うねりやま^まずも

おのづから熱さに倦^うめる波のうねり明^あく小暗
く暮れがてにけり

さす潮のかよふはたての水^{みづ}上に合^あ歡^ひはやさし
くにほひてあらむ

獨り寝

蠟の火をほのかにともしねもごろにわがひと
り寝るこの夜ふけつつ

屋根をすべる露の音こそかすかなれ今宵獨り
寝のゆかしきものを

街の屋根今しことごと白露にしとどに光る夜
空したしく

蠟の火の焰ほのほゆらげば陰のありしみじみとして
ひとり寝をする

ほのほのと若き心の笑あはまはしく寂しければな
ほゆかし獨り寝

ほの黄なる蠟のあかりはわが若き肉こに沁み入
りにほふなりけり

こほろぎはいとどあまねく鳴きふけりわがひ
とり寝の夜半のしたしさ

澄み透る高さ夜空に立ち極まり杉の木ぬれは
そよげりひとり

大正四年

蛙

喉ぶとの汽笛諸方に鳴れりけり懈さこらへて
朝の飯はむ

みしみしと吾兒に蹠を踏ませけり朝起さしな
の懈さ堪へなくに

わりびきの朝の電車にのるところしかすがに
光る夏帽子かな

わりびきの朝の電車にのるところ飛燕ひえん鳴くと
も人知るべしや

ひとり来て親しみがたき光りなり野つばらは
今眞晝なりけり

まひる野の光明道くわうめいどうを過ぎ來つつまことは何も
見ざりけるかも

濁り水にものかげうつるなやましさまことな
まけぬ心はあせり

光のなか圓く大きな瓦斯たんくしづもり立
てりこの街の上に

赤電車

赤電車ひた走りたりわが前に門^{かど}づけふたり黙^{もく}
し乗りぬる

赤電車に居眠るをんな三^{さん}味^み持てりすずしき風
の吹きもこそ入れ

赤電車永代ばしを走りけり上げ潮の香のなが
れくるかも

さ夜ふかみ街のもなかの大き川しんしんとし
て潮満つらしも

街の川深^{ふか}夜の潮の満ちにけり月ひんがしにの
ぼりたるらし

街の川さ夜潮満つれ橋の上の乞食こじきの子の歸り
ゆく見ゆ

夏の夜を更けてかへれば裏通り堀の水こそ満
ちあふれたれ

縁日えんじちのはてたるあとのしらじらと物の香かな
し風肌に吹く

百日咳

手をひける娘のあゆみもどかしく倦みの疲れ
に吾れ堪へなくに

たまたまにむすめを連れて家いづれ早くも吾
れの疲れけるかも

ぬば玉のこの夜も妻を叱りつつ身さへ疲れて
更けにけるかも

秋風の肌にともしきこの夜頃つまを離りてな
ほいく夜寝む

あかつきのかなかなのこゑかなしもよ妻が袂
をまかぬこのごろ

むらむらと南瓜はな咲く畑來つつ青さかまさ
り踏みにじりたり

移り住み夕^{ゆふ}食^けし居れば隣^{りん}家^かの子はげしく咳を
せきにけるかも

隣家の子百日咳の咳すなりすなはち吾等顔見
合はせぬ

百日咳はやりけらしもあまつさへ生あれてまも
なき吾が子なりけり

おぼつかなあの家この家に百日咳病む子あり
とを知りにけるかも

わがやどの櫛の木ぬれ夕影にさやぎしづまり
ひとり悲しも

物思へばあはれなるかもこの夜ごろ地ちにあま
ねきこほろぎのこゑ

けならべて秋づく雨のふるなべに住みふりし
家思ほゆるかも

あかときのかなかなのこゑすみとほりひとり
さめゐて思ひ堪へなくに

鷺

青空を斜め下りくる白鷺の光かなしもこの森
の上に

街かげの水べにのこる青葉森すさまじさかも
鷺群れ集くふ

鷺の群かざかぎりなき鷺のむれ騒然さうぜんとして寂
しきものを

雜然ざぜんと鷺は群れつつおのがじしあなやるせな
き姿なりけり

物おぞく鷺は群れ居り細長き木のことごとくに
鷺の巢の見ゆ

おのがじしあはれなる巢に立つ鷺ら立ち惚く
るなり森は明るく

この森に鷺こそ群るれ向う街晝の電燈ひつそ
りともり

鷺のゐる鷺の巢あまた見えにつつふと酸っぱ
ゆく汗のにほひす

さびしくも群れる鷺かしかすがに吾が足黒
く埃まみれたり

群れさわぐこの寂しさに堪へかねて空ゆく鷺
の専らかなしも

森の外そとのさるすべりの花夕日に照りあやに明
るく鷺さわぐなり

飛びゆく鷺歸りくる鷺森の上の空おほほしく
暮れかぬるかも

*

街かげに群れて集くへる鷺のこゑおどろに夜
は更けにけるかも

夜もすがらおどろおどろに群れさわぎ眠りな
き鳥の寂しくもあるか

闇ぬちに鷺の匂ひのおどろしく隙すきばかりなる
わがからだかも

闇ふかく鷺とびわたりたまゆらに影は見えけ
り星の下びに

かすかなる星の下びをつぎつぎに飛び行く鷺
の見えつつもとな

夜目にしるく落ちて來しもの手にとればあな
暖かし鷺のこぼれ羽

鷺さわぐ夜の森出でてあわただしあたたかさ
寝所^{ねどころ}わが思ふなる

梟

兵隊は練兵終へて歸るなりさ霧黄いろく日は
入らんとす

ひとりの兵列をはなれて陸橋の袂の店に煙草
を買ふも

兵隊の歸りはてたる代々木原霧ただよひて夕
さりにけり

霧こめて夕さりにけり代々木原物の匂ひの肌
に沁みくも

夕霧の代々木の原の歸りみち電燈あかき湯に
入りにけり

郊外の町の夜霧に湯屋の灯の火影あかるし遠
くは照らず

湯に入りて今は歸ればあやしかもほろすけほ
うほう鳴くこゑきこゆ

郊外の霧深みかも今鳴くはほろすけほうほう
梟のこゑ

ここに於て鳥のこゑ聞きにけりふくろふの聲
は寂しきものを

霧のなかにふくろふ鳴けりひしひしと吾が來
し方の思ほゆるかも

郊外に吾れ移りきて幾日へしこの夕ぐれのふ
くろふの聲

ほろすけほろ五こゑ六聲郊外の夜霧に鳴きて
又鳴かずけり

こほろぎ

雨の夜家を出でつつゆくりなく場末の寄席に
這入りけるかも

人すくなく疊あかるし雨の夜の寄席に這入り
て坐すわらんとすも

寄席にゐて古き小唄をさける時こほろぎ鳴け
り耳の近くに

雨の夜の寄席の疊のあかるきにほそほそと鳴
くこほろぎさこゆ

風

風吹きやみかうべあぐれば夜は深し硝子工場
の赤々と見ゆ

午近み疊にうつる日のかげの木影さやぎて風
いでにけり

材木堀

まつすぐに日はい照りけり町並まちなみに立てかくる
材きのま白き光

日ざかりの街いつばいに澄みひびく木工場きこうじやうの
鋸のこの音

午さがり街は静けし犬ひとつただくるくと
まはりやままずも

日はたけなは材木堀の錆び水の動きにござりて
潮みちさちたる

まひる日に潮は満ち來くもおもむろに材木筏堀
を入り來も

満ち潮に筏は入り來くあたらしき木の香は匂ふ
満ち潮の上を

まつさきに入り來し筏は堀まがり椎の木かけ
につなぎけるかも

夕日さす材木堀の土手の松青き松かさ眼に光
り見ゆ

郊外

秋の稲田はじめて吾が兒に見せにつつ吾れの
眼まなこに涙たまるも

代々木の草はら中の小さき池水青くして秋ふ
かみけり

秋晴るるこの原なかの小さき池子らはひそかに來り泳げり

日の色の匂ふ草はら風そよぎ子らは泳ぎをはややめにけり

草籍しきてうつつなに吾がありし時娘は咳せをせきにけるかも

秋晴の代々木が原の松かけにひとり息する吾れならなくに

木洩れ日の黄ばみ匂へる草むらに小鳥こもりて歩みぬにけり

日の色に面わあぐれば原なかをいざ葬列の歩み行く見ゆ

波の音

兩國橋を渡りしが停車場の食堂に来て珈琲を
飲む

汽車に乗り行かむと思ふ海のべのかなしき宿
に今宵はいねむ

しかすがに汽車に乗りたれ群肝むらの心さやぎて
眼をつぶるなり

汽車にのり心しきりにさやげどもやがて寂し
くならむとすらむ

腰をおろしてちつと眼をとち息づけばすなは
ち汽車は動き出でたり

外の面見れば畑原白く月照れり一思ひにてこ
こに來にけり

宵寒き稻毛の驛にひとり下り今はほとほと寂
しきものを

道ながらひそかに思ふ酒のみてひとり眠らむ
そのかの宿に

この一夜早く明けなと思ひつつさかづきあき
ていねむとするを

別れはて悲しき人をしのびつつひとりひそか
に甘え嘆くも

ここにきてさ夜の波の音きくとだに告げやる
べくは何か嘆かむ

茂吉に寄す

藏王の雪かがやけばわが茂吉おのづからなる
涙をながす

みちのくの秋ふかき夜を善根の祖母しづかに
目を眠りませり

おのづからこのうつし世の縁つきてみ佛の國
へまゐられにけり

あかあかとま晝の山の湯に浸りおのれ頭を撫
でて悲しも

山上のまひるの光あかあかと十方浄土あかる
かりけり

ふるさとのうま寝よくして長き夜のあかつき
しづかに目ざめけらしも

憶左千夫先生

お廣間^{ひろま}の風吹きとほり中庭の草花あかくゆら
ざたり見ゆ

あなまこと吾れらなまけぬ三年へて先生の遺
著いまでも出でず

三年へしこのおくつきにともなへばただ悔い
なげき女なりけり

大正五年

朝行く道

ひさびさに一夜の眠り足らひたりつつましく
して街にいで行く

朝早み電車のりかふる三宅坂鴨ゐる濠を立ち
てこそ見れ

朝早ささくら田の濠霧にほひ鴨うち群れてい
つばいにゐる

鳴むれて濠にみちたりつくづくと眼鏡二つか
け立ち見るわれは

朝日てる向ひの土手に鳴むれてつらなり並ぶ
その枯芝に

水の面に鴨はしづけしただ一羽飛び返りつつ
下りがてなくに

水の上に下りんとしつつ舞ひあがる鴨のみづ
かさくれなゐに見ゆ

濠のへにたたづむものは吾れ一人朝日あかる
く鴨なくさこゆ

わりびきの電車は
いまだ通りけり
日は濠に照り
鴨なくさこゆ

日あかるき濠に
むれゐる水鳥の
しづかなるこそ
あはれなりけれ

満員の電車に
乗りて濠見れば
うつらあかるく
鴨はむれゐる

夜に入る前

さむざむと街は
暮れつつ葬具屋の
ともし火白く
明るくなりけり

夕明りうすらに
にじみ街の上の
靄蒼寒く頹れ
むとすも

たそがるる窪地の街のにごり空波うつなして
鴉群れさぬ

幾群の鴉うづまさ舞へる下街のともしはにぶ
くともれり

暮れがてに餘光かがやき群鴉くろき翼に映え
にけらずや

たそがるる巷に高さ古銀杏鴉むらがりとまり
たり見ゆ

くろぐろと鴉むらがり飛びかへりこの夕空の
なほ暮れさらず

夕鴉群れて飛べども聲啼かず街ゆく人は首かうべを
あげず

露ながら街は暮れ入り
火事跡の灰の匂ひの暗
く泌みくも

街中の枯木にとまる群鴉
さながらにして夜に
入りにけり

闇深みまつたく夜になり
にけり高き窓一つひ
つそり赤し

節一週忌

さ夜深み酒さめ來つ
つ頭いたし腐りつきたる
蜜柑好み食む

不知火筑紫にいゆき
一人死にけり
こころ妻持ちて
悲しくひとり死にけり

下總の節なかしは悲し三十まり七つを生きて妻まか
ず逝きし

たなつものはたつものことねもごろに母に
言ひやりし遠く病みつつ

長塚の節を久に思はずけり月に光れる白梅の
花

雨降る

雪の上に夜の雨ひたにふりそそぎいのち亂る
る春きたるらし

雪の上にぬばたまの夜の雨そそぐ代々木が原
をもとほる吾れは

調練のあとすさまじき雪の野に雨ふりそそぐ
宵ふけにつつ

ぬばたまの夜の雨ふり土の上の雪しみじみと
溶けつつあるなり

ぬばたまのよるの雪原青白み雨ふりやまぜわ
れひとり立つ

ひとり立つわが傘にふる雨の音野にみちひび
く夜の雨のおと

しんとして夜の雨野に立ちぬつつ縦横無礙じゆうわうむびの
力を感じず

雨そそぐ夜の雪原にくろぐろと松は一本立て
りけるかも

宵ふかみ雨うちそそぐ雪の野を提灯ひとつに
じみ見え來し

雨くらき夜の原なかを人は來れしはぶきのこ
ゑつづけてきこゆ

この夜みちともし火持ちて來る人はつればあ
るらし語るこゑきこゆ

ぬば玉の雨夜の野路の行きあひに傘にひびか
ふ雨の音はも

移り香の木肌の匂ひしんとして人は行きすぎ
ぬ暗き夜みちを

雨の夜のこの原なかに行きあひし人のあしお
とさきて居にけり

ぬば玉の夜の原なかにひとり立ちみだり高ぶ
る吾れならなくに

早春さうしゆんの雨の夜ふけて橋わたり水のながるる音
ささにけり

歸りきて雨夜の部屋に沈丁花匂へば悲しほて
る身體からだに

雨滴あめしだりしみみにぎはしはしけやし寝ぬるを惜し
みさ夜ふけにけり

*

辻待車夫ひとりごちつつ躑む躑み込こみより炭とりいで
て火をおこしをり

淡雪

淡雪のわかやぎ匂ふてのひらを吾が頬ほにあて
てかなしみにけり

身にちかく君の居るかにおもひけりまがなし
き血の體たいを走るも

山びこ

終電車いま過ぎけらしおのづから街の灯ひそ
み土しらせ見ゆ

さ夜ふかみこの街かげの坂みちをひとり下り
行く吾れの足音

坂なかば歩み止むれば夜ふかみ凍これる大氣ひ
たに静けし

街かけの夜の坂路に立ちゐつつおのづからな
る寂しみ湧くも

犬啼きて山びこどよむさ夜ふかみこの街かけ
に山びこどよむ

山びこは遠く消えけり山びこのこのこゑきか
でいく年は經し

もろ啼きに犬啼きたてて騒ぐなべこだま亂り
ぬ寂しきものを

なき立つる犬のもろ聲いつせいに夜空にひび
く更けし夜空に

島の桃

春の雨ふりてゐるらしゆふべはもよく眠りた
りこの船の上に

春の海路のどけし船ながらつめたき水に顔あ
らふかも

この船の若き事務長と朝の卓たともに圍かみて珈
琲けいを飲む

春の雨ふりてしづけし瀬戸の海の水おぼろか
にささ濁り見ゆ

ゆく船のめてに生うれたる島一つくれなるにじ
み桃咲けり見ゆ

島山の桃のくれなる近く見えわが船すすむ春
雨のなかを

見るかぎり波さへ立たず桃の花匂ふ小島もい
まは遠しも

春の雨いま晴れむとすぬれわたる甲板かんぱんの上の
あたたかに見ゆ

船室に入りてはがきを書かむとすただにのど
める海の寂しさ

旅ゆくと桃の花さく島山をともしみすれど告つ
ぐべくもあらず

五月の朝

しつとりと五月朝風街を吹き乳ちぢの匂ひの甘き
花あはれ

くちびるにほそほそ吸ひしすひかづら吾が忘
れめやそのすひかづら

五月空光こぼるる街の上にくちびるふるふ過
ぎし日おもへば

せいせいと青草のびし濠の土手に朝日かがや
く長さ斜面に

日かがやく土手の斜面に松の影さやに映れり
青草の上に

さ緑に匂へる濠にこのあした小舟三つ見ゆ藻
を採る小舟

舟に採る五月の濠の藻の匂ひさやに匂へり朝
日照りつつ

みどり匂ふ藻を採りしかば濠の水濁りどよみ
て日に倦めり見ゆ

紫陽花

體たいぢゆう中にしとど汗ばみこころよく空氣のかわく
街をわが行く

白き蝶まなこに光りひとつ飛び七月まひる
街は静けく

しんとして夏の目てれる街なかに三味の音ひ
びく屋根の奥がゆ

日のさかり白みわたれる街なかに二挺の三味
線おとをひびかす

まひる日にさいなまれつつ匂ひけりやや赤ば
める紫陽花のはな

炎天のひかり明るき街路樹を馬かじりをり人
はあらなく

日盛りの街樹のかはをかじり居る馬の齒白く
あらはに光る

街頭に馬がかじれるすずかけの木肌か青く晝
のさぶしさ

死に行く魚

眞なつ日のひでりの空の蒸し曇り養魚池の波
ひかり寂しも

汐にがく沸き立つ池の魚のむれ堪へがてぬか
も浮びいでつつ

養魚池のひでりの水のにごり波むれ浮ぶ魚の
うろこの光

養魚池のひでりさざ波魚死にておびただしく
も浮びたるかな

無花果の青き葉かげのさざ波に動くとも見ゆ
れ死にたる魚を

ひろびろと夕さざ波の立つなべに死魚かたよ
りて白く光れり

養魚池の夕日さざ波てり光り子らは掬ふも死
にたる魚を

さびしくも夕照る池の水かげに生きゐる魚の
むれ喘ぐ見ゆ

鼠

川口の午後の汽笛のあはれなり事務室にゐて
汗ふくわれは

大川尻潮涸の泥のくろぐると熱きにほひて晝
たけにけり

かうべあげ汗ふき居れば眞赤なる鐵管つみて
行く船のあり

女一人沙蠶堀りゐる眞夏日の膿沸く泥を堀り
かへしゐる

日の光あざれて匂ふ泥の上をこは幾匹の鼠な
るらむ

眞夏日のひき潮どきの泥の上にあなけうとく
も群れゐる鼠

泥の上を鼠ちろちろあさり居り女は切に沙蠶
堀りをり

かつとして午後の日照れり橋の上を電車ゆく
音人あゆむ音

穢れ水やや揺れそめぬものうくも潮は陸くわがによ
せつつあるらし

やややに夕潮よせく泥の上の鼠けうとくな
ほあさりつつ

光よどむ眞夏夕波かきみだしもうたぼうとの
行くが悲しさ

あらしの朝

あかときの暴風雨あらしのなかに目をさめて吾が見
の寝顔見守りけるかも

この朝のあらしのなかの練兵の銃の音こそさ
こえくるなれ

あさあけの街の坂道たぎち落つる雨水踏みて
行くがともしさ

朝早み練兵終へて雨のなか濡れかへりくる兵
隊の顔

いちめんの練兵場の濁り水雨やや小降り朝空
あかし

雨くらき野の洞穴の青草に雀寄りつつしき鳴
く一羽

朝あけの豪雨の原にひとり立ち吾が素足こそ
濡れ光りけれ

あらしのなか野道に立てる吾が足の青白くし
てうとましきかも

曼珠沙華

雨はれの朝の光のひえびえと肌によろしく秋
ふかみけり

朝寒の日かげは深く疊にさし朝食ののちの心
すがしも

このあした電車にのらず徒歩ゆけばさやかに
吹ける秋の風かも

おのづから頭をあげて歩みくればみ濠の土手
に曼珠沙華赤し

み濠の土手のひとすみあかあかと咲きつづき
たる曼珠沙華の花

きんいろの日光すみて濠向う静けさ土手の曼
珠沙華の花

秋の風土手をわたればあかあかとひそかに揺
るる曼珠沙華の花

天高く秋の風ふき濠の土手吾れに離れてま
じゆしやげ赤し

深夜の川口

夜ふかみ宿直よるのちみの室の窓かけの白きひかりに蠅
ひとつ飛ぶ

宿直よるのちみして夜はふけにけり橋をゆく電車の音の
今はきこえず

ひつそりと窓をあくれば大河の夜の潮今しそ
こりてあるらし

この深夜潮涸の上にあかあかとかんてらとも
り人のゐる見ゆ

ひそひそと潮涸の上に女二人沙蠶を堀れりこ
のま夜なかに

かんでらの炎はなびく沙蠶堀る人の泥手の動
きやまなく

夜の潮涸に沙蠶堀りつつひつそりと唄をうた
へりかなしきものを

潮干ればかなしきものかぬばたまのこのま夜
中に沙蠶ほりつつ

河尻の橋脚の灯のひつそりと水にあかるく夜
は更けにけり

寝ぬべくは心はさびし窓出でて岸の小舟に下
り立ちにけり

大河の引潮どきの夜の風吹くとしもなく面おもてに
さびしも

ひそひそと沙蠶を堀れりさ夜ふけの潮涸の匂
ひ暗くさびしき

さ夜ふかみ潮涸の上の泡の音ふつふつとして
ひとりしさびし

夜の河尻暗く立ちたる庫くらかげにほろほろに鳴
くこほろぎのこゑ

今し今ごかいを掘れりぬばたまの夜の潮涸の
久しからめや

たまたまに永代橋を赤き灯の一つ走れりさ夜
ふかみかも

霜 風

朝さむみ路まがりゆく崖のかけ銀杏の落葉黄
におびただし

霜晴の日の照る坂に吾が立てば鴉樹に下りて
歩みけるかも

吾がむすめほうほうと云ひて鴉追へど鴉は飛
ばずあゆみゆきつつ

霜晴の野をまがなしみ歩きつつ銀杏いんこう黄落くわうらくす寺
にきたれり

大寺の屋根の斜面のともしもよ霜の雫の日の
光りつつ

兒をつれて初冬しゆとうの寺にまゐりたり旅を戀ひつ
つころ寂しも

わがむすめ銀杏落葉を拾ひつつよろこびてを
り吾れもひろはむ

吾れと吾が兒と野なかの寺に銀杏の葉ふみつ
つひろふその銀杏の葉

大正六年

兒を伴ひて郷に歸る

一 夕かげ

ここに^{くま}して^ま伴あらねば夜道^{よみち}かけわれと吾が兒
と徒歩^ひ行かむとす

俤^{おとこ}なくて町のはづれになり^{なり}にけりかの山かげ
にこの道入るか

この國の冬日あたたかし然れどもかの山かげ
はすでにかけれり

山峽やまがひに道入らむとすかへり見れば海さららかに
午後の日照れり

冬の日の海かがやけりひと掬くひきよさま水を
喉のどにほりすも

わが兒よ父がうまれしこの國の海のひかりを
しまし立ち見よ

ゆく道は夕づきにけり日のてる山のいただ
き見つつ悲しも

五百重山夕かけりきて道さむししくしくと子
は泣さいでにけり

さらさらと水の音なごする山あひに道は入りつつ
夕寒きかも

山あひにてれる日かげのほろほろに肌はだつめた
く夕づきにけり

をさなごの手をとり歩む道のへにみそさざい
飛び日は暮れむとす

夕寒き山がひの道行き行くと車のおとのあと
よ聞こゆる

歳の暮の醤油もとめて歸りゆく車をたのみわ
が兒は乗せし

この道に連つれになりたる山人が手にさげてゐる
雉子の尾ながし

連れだちし人はわかれぬ夕さむく風明りする
山あひの道に

荷車に吾兒のせくれし山人もこの小みちに
別れむとすも

山の上に月はいでたりわが兒よ父と手をと
り
また徒歩ゆかむ

山の上に月は出でたり汝が知れるかのよき歌
をうたひつつ行かむ

二 鶉の聲

ちちははと朝食し居ればわが耳に透りてひび
くひよどりの聲

わが丘のせんだんの木に群れきつつ鳴きのさ
やけき鶉ウツクの聲

わが門の木の實ついはむ鶉ウツクのすはやさうごさ
見れどもあかず

群れあつ々鶉ウツクなけりほろほろとせんだんの實
のこぼれけるかも

あたたかく朝日ながらふ枯草の丘びのみちを
わがあゆみ居り

この丘の緩ゆるくのびたる裾のべを父とわが兒と
あゆみくる見ゆ

祖父おほぢにはじめて逢ひて甘あまえぬるわが兒の聲の
ここにきこゆる

あからひく朝霜とけてわが丘の樹々にかがやく日の光かも

三 明るき空

おのづから眠り足らひしわが目見^まに村は明るく匿^{かく}すところなし

冬の日のま晝あかるき古家^{ふるいへ}ぬちおそろしきかもこの安けさを

麥畑をさつつともしもわが家の白き障子に日の照る見れば

密柑山にわが兒ともなひ木の杪^{すゝめ}に残る密柑をもぎてやるかも

古里のここに眠れる吾子が墓をその子の姉と
いままうでたり

子をつれて小川のふちを歩みつつ竹村に入り
ぬ明るき竹村

水涸れし小川がなかにおり立てば竹の根あま
た岸にさがり見ゆ

日のぬくき小川のふちの草の上にわが兒と二
入密柑たべ居り

四午 鐘

ふる里の眞晝の光しづかなりをんなこどもの
聲きこえつつ

日の光あまねく満てり山の上に細く立ちたる
煙は消えず

わが村の午鐘ひるかねのおときこゆなり一人庭にゐて
聴きにけるかも

冬晴れて村はあかるし午鐘ひるかねのおとゆるやかに
きこえ來るかも

山がひの二つの村のひる鐘の時の遅速もなつ
かしきかも

五雨の一日

ふる里に二夜眠れるこのあした雨しとしとと
ふりいでにけり

大きなる藁ぶき屋根にふ雨のしづくの音ねのよ
ろしかりけり

のびのびと朝の縁えんに立ち門畑の麥の芽えにふる
雨を見にけり

搾乳ちち夫りきたれるからに幼な吾兒わがこからかささし
て厩うまに行くも

ふる里の雨しづかなり母も吾わがも悲しきことは
今日はかたらず

ちちのみの父は厩うまに行きませり雨はあかるく
午ひるにしなるらし

父うへの秣まさる音ねさこゆなり吾兒わがこをせおひて
厩うまに行くも

斯くしつ々幾日とどまるわれならむ麥の芽ぬ
らす雨の静けさ

六冬 虹

この夕べ空しぐれつつうす日照り川の向ひに
虹たてり見ゆ

おぼほしく冬の虹たてり川むかひ竹の林のひ
かりは揺れず

冬空に虹たちわたりうら悲しそはかとなき
心のみだれ

この夕べしぐるる空に立つ虹のことさらびた
る光さびしも

虹たちて明^あれる冬のたそがれるを仔^こ牛^うひきつ
つ人かへる見ゆ

おぼほしく冬虹たちて空明^ありいのちさびしも
ふるさとの道に

冬虹の光まがなしからからと竹をたばぬる音^ね
ぞきこゆる

ふゆ空の虹さえむとす竹山ゆ竹をかつぎて人
出で來たり

八風吹く日

風吹きて海かがやけりふる里に七夜は寝ねて
今日去らむとす

馬車おりて吾兒の手をとり歩みけり沖つ風吹
く崖の上の道

崖たかみ外洋青く晴れわたりさうさうとして
風吹きやまず

吾兒が手をとりのつあゆむ崖の上の街道遠く
見えにけるかも

まながひに冬の潮騒あをあと光りていたし
音はきこえず

風吹きて海光いたしわがからだはげしき呼吸
に充ちにけるかも

いくほどをわれら歩みしあをあと潮騒光る
崖の上の道

犬の聲

月寒く夜はふけにつつおぼつかな土あらはな
る廣原行くも

はてしなく土のつづける夜の原を渦まきとほ
る木枯の風

月白く風さえわたりこの原の四方しゆおこる犬
の長鳴き

この原をめぐり吠えたつ犬の聲さむざむと夜
はふけにけるかも

月寒く吠えたつ犬のもろごゑのこの野をめぐ
り夜すがら止やまず

月の下を雲ゆくなべに夜の原のあたり小暗く
沈みてを見ゆ

息づみて人眠る街にこの道のふかく入り行く
寂しきこの道

ふたところ拍子木の音きこゆなり原のあなた
の街の寂しさ

轉居

移るべき家をもとめてきさらぎの埃あみつつ
妻とあゆめり

けならべて街のくまぐま歩けども小さきよき
家ありといはなくに

ささらぎのあかるき街をならび行き老いづく
妻を見るが寂しさ

午^{ひる}すぎて疾風^{はやて}吹き立ちささらぎの春のほこり
は街をおほへり

たまたまに大き明家^{あきけ}を入りて見つ寂しけれど
もその大き家を

土^{つち}ほこり白く被^かける街ばかり眼には見えつつ
ただに疲れぬ

入り來つる小路^{こうぢ}のおくにしらけ咲く白梅の花
寂しみにけり

いくたびか家は移れる崖^{がき}したの長屋がうちに
今日は移れる

鬼怒川

四月初旬下總結城に故長塚節氏の宅を訪ふ

藪かげゆ小舟にのりて水たぎつ鬼怒川わたり
ぬ春の寒さに

鬼怒川を西にわたりて土踏めば今さらさらに
君ししぬばゆ

鬼怒川の川べゆきつつ見さくるや筑波のあた
り雲ただに暗し

春寒きふりかけ雨に傘かしげ鬼怒の川べを吾
れひとり行く

ゆきゆくと川の堤の水蠟樹の芽白くひかりて
雨はれにけり

春の野の大野がなかをみつみつし鬼怒の流れ
は激ちやまずも

春さむき灰色空にただひとつ雲雀あがりて鳴
きの久しも

道入れる雑木林にひともの辛夷白花にほひ
てありけり

さぬ川のつつみ離れてこころぐし竹村つづく
街道を行く

しみじみと語らふひまも母刀自はしもべが伴
に物のらすかも

君ゆきて母刀自ひとり家のことに心くばらす
見つつ悲しも

しもべらはいまだ歸らず大きな家の春の夕べの
寂しくありけり

春さむみ風呂あみ居れば家裏の竹のはやしを
風わたるなり

倉かげにあまたつちかふ椎茸の匂ひさびしも
朝のしめりに

竹林の日なたに圍ふ苗床に芋の芽あかく萌え
いでにけり

ここに來て君が命をなげくだに吾が身ともし
く思はざらめや

うづたかき堆肥の匂ひうら悲し春日あかるく
しぬび堪へずも

筑波山

宗道より五里の夜道なり

町はづれ暮れて灯さぬ小家にし夕餐たうべつ
夜道行かむに

野は暮れて道しろじろし草鞋わらじにかへし足もと
踏みて見にけり

もの問へどことばすくなき村の娘むすめと夕の長橋
わたりけるかも

暮れはてて灯影ともしき宿しゆくのなか寂しけれど
ものどに歩むも

このさきに家あらぬらし宿しゆくはづれたばこを買
ひて道よくさくも

ゆくみちのくぬぎの林松林おぼろおぼろに月
のぼる見ゆ

林間に沼あかりしてころろころろ蛙かつ啼く
一人い行くに

目をかれぬ筑波繁山ほの白く霞たなびき春の
月てれり

小筑波の町の灯明りたかだか見えつつもと
な森はつきぬに

あかるきは娼家の明り筑波ねの夜ふけの町に
われつきにけり

筑波山さ夜はふけつつ磴道に娼家のあかり照
りて寂しも

つれ立てる筑波少女ら吾に別れ山にし入れば
すぐに木をこる

いただきは近しと思ひをとめらが木をこる姿
しまし立ち見つ

霜どけし尾の上の土を踏みゆけばぶなの木に
ゐて驚なくも

わが妻の生れし國原いく筋の水ひかりつつ静
ころなけれ

わが妻がをとめとなりしそのかみをしぬび寂
しも吾れは知らぬに

巖角につみてかなしもひと莖にひとつ花咲く
かたくりの花

一日

ほとほとにころさびしみ勤めを半日にして
歸りけるかも

ひとりして歩き歸らな寂しみと人を訪はむは
すべなきものを

さびしく歩いて居れば街の上を春の埃の捲き
立ち行くも

風に向ひひた馳せ過ぐる自動車のあとの埃の
さらめき立つも

篠懸木の新芽日に照るこの道を歩き行きなむ
おもてをあげて

木々の芽は天に諸向きかがやけりこの安らかにするどき光り

街ゆけば芽立めだちの光りうらがなし人のたよりのつひに來らず

別れては遙けきものか新芽立つちまたを一人今日も歩める

朴の花

ゆく水のすべて過ぎぬと思ひつつあはれふたたび相見つるかも

相見つる悲しき思ひ堪へがてに朝戸は出でつ妻は知らぬを

のぼりゆく坂をおほひてま弓なす瑞青空のこ
ころよきかな

朴の木のわか葉がうれに大き花白くかがやき
夏さりにけり

空しぬぐわか葉がうれに白黄びやくわうの匂ひかなしき
朴の木の花

こころぐきけさの歩みか朴の木の花さく蔭に
ひとり立ちつつ

汝なを思ふこころ悲しく甘あましきに白くかがやく
朴の木の花

この嘆きとはに堪へつつ秘ひそかなる乏ひそしき思ひ
亂さずあらむ

白^{びやく}黄^{くわう}の朴^{ぼく}の木^{のき}の花^{はな}いちじろくいまはなげかじ
寂^{さび}しかりとも

うち嘆^{なげ}くなげきも甘^{あま}しあひぬれば過ぎにしこ
とは忘れけらしも

はかなかる逢^あひなりながらほのぼのとなごり
こひしき朴^{ぼく}の木^{のき}の花

夜^よ深^{ふか}み若^{わか}葉^はの匂^{にお}ひしめやかにたもとほりつつ
わかれかねしか

かき終^はへしながきてがみをふところひそか
にいて外^{そと}にいでにけり

まがなしむものあまたにわかれけりひとり
ゆかむにわれは堪^たへぬに

微恙の後

曇り日の若葉やすらかに明るかり墓地ほちを通り
て湯に行く吾れは

ひそかごと持つとはいはじ曇り日の若葉明る
く親しきものを

夕墓原

あとを追ひ騒ぐ子おきて夕ぐれのこの墓原に
ひとり來にけり

さみだれは一日いちにちはれて墓地なかの大路は白く
夕さりにけり

青葉かげかさなり暗き墓はらを夕かたまけて
ひとり廻る

墓原の扇骨木若葉のくれなるの匂ひはうせて
時たちにけり

いちじろく墓原の土に散りしきしいちしの花
もすぎて久しも

兵營のらつばまぢかくなりわたり夕墓はらに
こころ落ちぬず

兵營の夕べのらつば街の上をこだまさびしく
うつりゆくかも

そぞろ来て獨歩が墓に出でにけり煙草吸はむ
と袂をさぐる

木の下もとによその子どもとわが子ども青梅食あじむ
をけふ見たりけり

夕暗の墓地の小みちにうづくまり物は思へど
まとまりもなく

たたずみてあたりを見れば白き墓立ちつづく
なり夕の墓原

宵暗き墓はら來つたまたまに香かぐのにほひの
うつしかりけり

墓地下の街の小家のひとならび障子あかるく
灯ともせり見ゆ

墓地下の街の小家の灯の明り子ども聲だかに
本よむさこゆ

左千夫忌

茅場のや水づく庵をおとなへば晝寝しありけ
り假床の上に

百日紅

家いづればすなはち見ゆる墓原にたかだかと
咲く百日紅の花

百日紅に日ははや照れり朝戸出て汗ばむ顔を
拭きつつゆくも

いそぎつつ朝は出でゆく街角まちかくに咲きて久しき
百日紅の花

日ざかりの墓ほち地ちを通れり朴ほの木の葉の枝もり枝
に鴉からゐる見ゆ

さるすべり花咲くかげに男おとこゐてちひさき墓を
堀ほりりにけるかも

墓地ぼたかげの木の下した闇やみにうち集あつひをとこをみな
ら晝ひる餉くわして居り

半はんどんの今日けふいちはやく吾れ歸り汗あせじむ服を
ぬがんとするも

夏なつ休み貫つらふ日ひ近ちかししかれども旅たびにも吾れは行
きがたからむ

梟

飽くばかりうち息はむと吾が待ちし夏の休み
は來れるものを

夏休みすでにいく日をいたづらに心さわがし
く過ぎにけるかも

あれこれとすべき爲事にいらちつつ身ぬちの
力萎へ果てけらし

外を見ればいたき光のみなぎれりむなさわぎ
つつ汗湧く吾れを

ま夏日の動物園にきたりけり鳥けだものも寂
しく立ちゐる

白日はくじつの光りまがなしふくろう梟ははまなこみひらき土に
立ちゐる

梟はまろき眼をひらき居りをかしきものは吾
れにあらぬに

ま晝まの路上に吾れの影くろしひとりまぶし
く歩みつるかも

朝

枝重く土に向ひてなり垂るる赤き木の實を手
になでにけり

朝歩み遠く來にけりたなそこに赤き木の實を
一つ持ちゐる

朝はやく野にし出でゆく母うへを今さらにし
も吾が見つるかも

うつそみに堪へていそしむたらちねの母の命
は長くしまさむ

うやうやしつねやはらかきたらちねの母の言
葉を妻に告げやらむ

つつましゝ吾が世生さなむ妻子らをひもじか
らせじ吾が妻子らを

充ちみてさけさの心かいまよりはかならず妻
を叱らずあらむ

蟹

谷川のすくなき水を踏みのぼり石こしつ
つ
蟹をとらふる

女たち豆の葉とりてゐるならしとりをり笑ふ
聲のきこゆる

崖の上の芒に這へる葛の葉の蔓をたぐれば花
ごり咲けり

鉄ふとき雄蟹を二つ捕らへたり青きすすきに
しばりて歸る

岩かげの水のよどみに大きなる蟹のぬけがら
白く見えつつ

谷川の水踏みゆくと藁草履ながくのびにし幼
な日思ほゆ

蟹二つすすきにしばり持ち来れば匂ひまがな
し泡をふきつつ

澤蟹のかたき甲らを今しいま手にはがすだに
なつかしきかも

暴風雨の跡

安房布良に赴きて

ゆく道に倒れ木いよよ多くして外海ぐわいかい白く見え
にけるかも

大木おほきの根こぎたふれし道のべにすがれて赤き
曼珠沙華の花

うち倒れし家並見つつ吾が来れば海女らはだ
かに焚火して居り

潜さして今し出で来し蟹をとめ顔をふきつつ
焚火にあたる

かくのごと荒れたる海にまた直に命したしみ
いさりするかも

すぐれたる身ぬちの飢ゑを感じつつあらしの
あとの海邊を歩く

夕日さす波うちぎはに童子ひとり大きき口あき
柿たうべ居り

うち荒れし突堤のうち夕日てりさざ波あかし
そのさざ波を

夕風きて大島近し病ひ養ふ土田耕平につつが
あらすな

あらし暴れし海べの村を視に來り日はくれぐ
れと暮れゆきにけり

宵ながら海くろぐると村人のねむり深からし
暴風雨のあと

ぬばたまの闇の汀をひとりゆきうちよる波に
素足をぬらす

闇の夜の海ふかぶかし沖べには赤き火ひとつ
見えにけるかも

曉ふかく潮さしくれば打ち出でて網よするら
しあまのよび聲

あらしのあと夜ふかき海に働くか力みちたる
人間のこゑ

しらしらと海明け來り網寄する小舟ひとつら
見えにけるかも

曉あけはやく海にはたらき歸りきて白き飯食む顔
のたふとさ

牛

一冬 晴

老いませる父に寄りそひあかねさす晝の厩に
牛を見て居り

父の面わゆたに足らへり冬ながら二頭の牛の
毛並よろしき

日おもてに牛ひきいでつなぎたりこの鼻繩はなづな
の堅き手ざはり

乳牛ちぎの體たいのとがりのおつづからいつくしくし
てあはれなりけり

さらさらとかな櫛くしもちて搔かきやれば牛の冬毛
の匂におひかなしも

おとなしき牛の額ぬかをねもごろにわがおよびも
て搔かきにけるかも

けだもの大きせなかにはひつたりと兩またのての
ひらあてて寂さびしも

さ庭べにつなげる牛の寝たる音おほどかにひ
びき晝ひるふけにけり

ひとりゐて飼葉の藁を切りにけり冬の真晝の
厩は明るく

冬日さす大き厩に干草のさ青の匂ひなつかし
さかな

牛久しく寝てゐたるあとの庭土の匂ひかなし
も夕日照りつつ

夕寒み竈かまどにひとり火を焚きて牛の湯を沸かす
その牛の湯を

夕寒み牛に飲ませる桶の湯に味噌をまぜつつ
手にかきまはす

音おと立てて桶の湯をのむ牛をまもり宵闇さむき
厩にゐるも

ニ夕 渚

菜^ぐ莢^みの葉の白くひかれる渚^{たぎさ}みち牛ひとつゐて
海に向き立つ

ふるさとの春の夕べのなぎさみち牛ゐて牛の
匂ひかなしも

夕日^{ゆづり}てる笹^{ささ}生^{なま}がなかゆ子^こ牛^{うし}いで乳^{ちゅう}のまむとす
親^{おや}牛^{うし}はうごかず

夕^{ゆづり}なぎさ子^こ牛^{うし}に乳^{ちゅう}をのませ居^ゐる牛^{うし}の額^{ひたい}のかが
やけるかも

入りつ日の名残さびしく海に照りこの牛ひき
に人いまだ来^こず

三 草野原

草原につなげる牛を牽ひきに行く日のくれ方の
ひとり寂しき

しらじらと茅花はなほけ立つ草野原夕日あかるく
風わたるなり

ゆふ日照る青草原にじつとして牛は立ち居り
鼻網はなづなをながく

日もすがら牛を繫つなげるあとどころすさまじく
して野は暮れむとす

繫つながれし綱づないつばいに廻まりつつ牛は食はみたり
この草原を

繋つなぎたる端は綱づな解さかまくわが寄れば牛は大きく
首向けにけり

鼻はな綱づなを吾がひくなべにもそろもそろ牛歩き出
づ夕日草原

夕ぐれの浅川わたる牛の足あ音おとさびしみにつつ
鼻綱をひく

草原ゆひとり牛ひきかへりたりうまやの前の
この夕明り

厩まわら内うちに入るるただちに大き牛ふりかへりきて
首のばしたり

牛入れて夕のうまやに吾があれば牛の水持ち
父の來ませる

青草のまぐさに交^まざる切^き藁^{わら}の白くともしく夏
ちかづけり

四朝 涼

朝庭の梨の木かけに牛つなぎ父は立たせり牛
をながめて

朝^{あさ}草^{くさ}に足らひたるらしおほきなる項^{うなじ}をあげて
牛の立ちゐる

朝庭^{あさばた}ににれがみ立てる乳^{ちち}牛^{うし}の白^{しろ}き胸^{むね}前^{さき}透^すき照
れり見ゆ

朝日^{あさひ}のなか牛ひとつ立てり黑白の斑^{まだら}あざやか
にいつくしきかも

いつくしく正面まへに立てる牛の瞳めのか黒に澄め
り深くうるみて

牛のうなじ手に撫でぬれば角かどの根ねの暖かしも
よ堅かたき角かどの根ね

まつすぐに向うむき立つ牛のせなかゆたにい
つくしその方ほう尻じりも

五白 日

ふるさとのまひるの道を一人行き埃ほこりまみれし
わが足寂し

ふるさとの海には來つれ一めんいめんに眞晝の光り
白く悲しも

ま夏日の潮入川の橋のかげ大き牛立てり水に
つかりて

橋のかげすずしく映る水中すゐちゆうに白牛ひとつ立ち
てうごかず

日に熱き欄干てすゐに寄れり橋したの大き白牛わが
のぞきつつ

橋下にわがおり行けば砂しめり赤き小蟹のい
くつもゐるも

河中に立ちてひさしきことひ牛水にぬれたる
尻尾しりなふりつつ

六露降る

朝なसानおく露寒み秋の野の草の葉硬く肥え
にけるかも

草刈りにあさあさ通ふ山坂の秋はぎの花咲き
にけるかも

秋ふかみ刈る朝草は短かけれど硬く肥えつつ
手にこちよし

秋づきてかたき草の葉ねもごろに牛に切りや
るその朝草を

秋の野に朝草刈り来ひもじさのころよくし
て笑まはしきかも

朝はやく秣刈りきて一ぱいのつめたき水を被
りけるかも

この朝の秋のさやけさいちじろく牛の乳の出
よろしかりけり

七時 雨

久方のしぐれの雨に沾れそぼち刈田かへすと
牛の鼻とる

小田すくと牛の鼻とる鼻竿のしづくさびしく
時雨ふるかも

山かげのだんだん小田をつぎつぎに牛ひき移
りすきかへしつ

時雨の雨さむざむふれば鞍下に片手さし入れ
牛の鼻とる

時雨晴れ日のさしくれば鼻竿はなざなの白くかわきて
ゆくがうれしも

時雨はれ日のてるなべに父も吾も笠をしとり
て畦しづにおくかも

笠ぬぎて心あたらし鼻どるや牛はますぐによ
く歩みつつ

刈小田に鼻どりしつつ山添ひの柿の實あかく
眼めにつくものを

刈田すく晝の休みに木にのぼり赤き熟柿をさ
がしつつ食はむ

晝休みやすみてあれば田の土手に牛は角する
土くづしつつ

刈田すく鼻どりしつつ稲莖にあしうら觸りて
こそばゆきかな

久方の時雨の雨はふれれども夕早くして爲事は終へむ

さむざむと夕の谷田を時雨ふり牛のあゆみに
ぶくなりけり

かへりきて夕の厩に鞍とれば見のかるがるし
牛の姿の

八坂の上

牛ひきて下らむとする坂の上ゆふ日に照らふ
黒牛のすがた

かぎろひの夕日背にしてあゆみくる牛の眼まなこの
暗く寂しも

398

屋上の土 完

卷末小記

歌集「屋上の土」の廣告が出現したのは大正二年の六月であつた。由來十二年間、近刊未刊としてアララギ叢書の廣告中に名を連ね「古泉千樞氏の歌集も愈々印刷に附し近日出版の運びと相成候間御期待願上候」と機關誌の編輯使に屢々報ぜられながら、遂に今日まで上梓の機を得なかつた。此間歌壇はこれを以つて或は著者の懶惰とし、或はその性格の敦厚なるが故だと評した。編者はその何れに答ふるの言を有せぬが、兎に角「屋上の土」が亡師の生前に完成を見なかつた運命に對しては遺憾とする所が甚だ深い。

昭和二年八月十一日先生の没後「屋上の土」編集の目録と原稿の一部とが發見さ

れた。本集は之を基本とし、先生の知己である先輩諸氏の了解を得、齊藤茂吉氏の監督の下に編んだものである。

先生の手記になる本文原稿は明治四十三年同四十四年大正二年同六年の全部と明治四十一年同四十五年(大正元年)の大部であつて、目次によつて新に採録しものは明治四十二年同大正三年同四年同五年の全部と明治四十一年同四十五年の一部である。目録には明治四十一年より大正六年に至るものを収録し新たに大正七年八年の作が朱を以つて加へられてあるが本集には最後の二年の歌を割愛した。述上の不明の先生の手記は極力探査したが、遂に發見する事を得なかつた爲、紛失の分だけは發表された諸雜誌を調査して目次によつて増補するの止むなきに至り、従つて原目次の歌數一千三百五十一首は一千首に減少した。

新補した歌は目次の題目と歌數とを基とし、幸ひ雜誌に發表された作歌の頭首に標識されてあるものを先生の意思と見て照應し、數の多少による相違は齊藤茂

吉氏の取捨によつて決定した。目次中に題目と歌數とが記されながら之に相當する作品を發見し得なかつたものに左の諸篇がある。

さみだれ(五首)夕やみ(五首)折にふれて(三十二首)青木湖(十四首)以上明治四十二年、洪水(十七首)椋の芽(八首)以上明治四十三年、利根川(八首)妻生むらんか(八首)陸岡行(十首)隣り(八首)悼左千夫先生(五首)以上大正二年、春の海(八首)若布刈(十一首)以上大正五年、小湊(七首)以上大正六年

以上の諸篇の外目次數に對して數首不足のものが若干あるが、之等の不明の作品に就いては當時の雜誌その他を數回調査し且古泉家の藏籍を隈なく探査したがその片影すら發見し得ず、知友諸氏の記憶に從つても遂に訪ね得なかつた爲に止むなく望みを斷つた。後年發見される機會があるならば勿論拾遺すべきものであり、今回の編者は當然の怠慢の責を負はねばならない。或は之等の諸篇が先生の禁中に作歌すべく意思されてゐて形成されなかつたといふ種類のものかも

分らない。之に反して目次中になくて新たに編入したものに、雜詠(五首)明治四十一年、南の山(五首)明治四十五年の二篇がある。これは「川のほとり」から採録した。

原稿中であつて編纂の都合上除いた歌に左の三首がある。

街の上を低く飛びかふつばくらめ紺のつばさの日にひかりつつ

(郷を出づる歌、明治四十一年)

君待つと一人立ちつつねむの葉の眠りてゆくを見ればかなしも

(合観の花、明治四十三年)

苗代の泥なごむるとなごみよみよるこぶ翁おぢに春の風吹く

(土、明治四十三年)

右の内前二首は改作されたりしく推定されるのであるが確證がないので擧げた。

次に本集に収めた作品中改作されたものはその最も新らしく訂正されたものを以つて編んだ。大正三年頃「屋上の土」は一度印刷に附せられたが、頭首の三十二

頁だけ組まれた再校の校正刷にも従横に朱が入つてをり、其後屢々原稿中にも手が入れてあつて改作を探ることが先生の最後の意志と思つた故である。大正十五年の秋最後に歸省された時にも整理さるべく「屋上の土」の原稿は携へられて至つた。しかし此の時も遂に包は解かれること無くして東京に持ちかへされるに至つた。自選歌集「川のほとり」と照應すると改作されたものが中々ある。先生が生存されてゐたならば本集の歌も更に朱筆によつて改めらるべきものが或は相當にあつたかも知れない。此の事は編纂中にも終始編者の頭を往來して、時には「屋上の土」は永遠に未刊の書とすべきではないかと屢々迷つたのであつた。然し今これを編まざとも古典を齟すといふ興味が人世から失はれぬ以上いつの世にか後人の手に依つて編まれぬとも限らない。その時に當つて學者の不審に訴へるより矢張り昭和の現世に於て梓に上らせて置く方が便益であると考へなほして整理した。

出来得るならば改作されたものには一々原作を附したかつたがこれは許るさ
れず、又この短文に於ても全部を別記することは到底不可能にあるので次に數首
を擧げてその片鱗を示すこととし、委しくは近く機關紙に發表して特志の諸氏に
便することとした。

(原作)阜月空明るき國にありかねて吾れこそは去らめ君のかなしも(一頁)

(改作)阜月空明るき國にありかねて吾れはも去なめ君のかなしも

(原作)阜月野の光りのなかに今さらに君が目すらを欲りてなげくも(四頁)

(改作)君が目を見まくすべなみ五月野の光のなかに立ちなげくかも

(原作)湖のべのこよひのやどりいみじきに春のいかづち鳴りはためくも(八二頁)

(改作)湖のべのこよひのやどりいみじくも春のいかづち鳴りわたるなり

(改作)湖のべのこよひのやどりいみじきに春神鳴のなりわたるなり

(原作)湯をいでて夜の廊下のつめたきにわが胸さわぐ君ひとり置き(一五四頁)

(改作)湯をいでて夜の廊下のつめたきにふと胸さわぐ君ひとり置きて

(原作)蠟の火をほのかにともしねもごろにひとり寝ねつつ物をこそ思へ(九七頁)

(改作)蠟の火をほのかにともしねもごろにわがひとり寝るこの夜ふけつつ

(原作)風ふきて海かがやけりふる里に七日とまりて今日去らむとす(二二二頁)

(改作)風吹きて海かがやけりふる里に七夜は寝ねて今日去らむとす

(原作)厩内に入るるただちに大き牛ふりむきにつつ首のぼしたり(二八三頁)

(改作)厩内に入るるただちに大き牛ふりかへりきて首のぼしたり

「屋上の土時代は歌を作ることにも最も苦んだ時であつたと思ふと自撰歌集「川の
ほとり」の卷末記には見えてゐる。明治四十一年の五月郷里安房國吉尾村から東
京に出て來た生活上の一轉機を劃した時代を振出しに年齢にして二十三歳より
三十二歳迄の十年間の作品によつて本集は形成されてゐる。年譜をたどれば三

人の女子をもうけて内の次女を喪ひ、師伊藤左千夫並に長塚節その他の知己の計に逢ひ、居は四度これを移し、信濃近畿四國に旅行し、富士御延鹿野筑波の諸山へ登つてゐる。此間先生の嘗膽の現實生活は筆紙には盡し難い。その苦行の生活を透して輝く先生の藝術に對する信念は本集の隨時に讀者の逢着することであらうと思ふ。作品はおほむね同人として編輯者としてその半生の努力を傾けた雑誌「アララギ」に發表されたものであり、その一部は新聞「日本」雜誌「アカネ」「比牟呂」創作「地上巡禮」潮音「近代思潮」珊瑚礁「短歌雜誌」中央文學「文章世界」等に掲載されたものである。當時を憶へば誰か十年後の現在に至つて僕の手によつて「屋上の土」が編まれる事を想像し得たらう。まことに機縁といふものは不思議である。

亡き先生にしたならば僕の如きは頼むに覺束ない一人の門下に違ひなかつた。同時に本集の編纂者としても決して適任者ではないことを僕は思ふ。それにも關らずどうやら出版の運びに至つたのは、始終に互つて監督を願つた齋藤茂吉氏

を初め多くの諸先輩故師の生前より没後に至る迄御世話を惜まれなかつた改造社の社長山本實彦氏其ほか一々名を挙げ難いが古泉千樞の名に寄せられた諸方面の御後援の賜物である。同時に發行遅延の爲多大の御迷惑をかけた東、堂主西村陽吉氏アルス主北原鐵雄氏其他の關係者諸氏並に本書の裝幀者森田恒友氏等に對しては茲にお詫びやら御禮やらを厚く申上げておきたい。

遺稿の編纂ほど世の中に果敢ない仕事であらうか。しかも僕は年若くして幾度かかういふ運命に従はねばならなかつた。菩提の鐘を爲樂と響けと突くならば、今の僕の氣持にもさうした幽かな念願が動いてゐる。余白を頂いてこれだけを記しておく。昭和三年三月末 牛込にて 大熊長次郎謹記

現 代 代 表 自 選 歌 集

第 二 回						第 一 回					
土岐善麿著	前田夕暮著	若山牧水著	窪田空穂著	與謝野晶子著	北原白秋著	木下利玄著	折口信夫著	中村憲吉著	古泉千経著	島木赤彦著	齋藤茂吉著
空	原	野	槻	人		立	海	松	川	十	朝
							や		の		
							ま		の		の
							の		ほ		
仰							あ			と	
							ひ				
ぐ	林	公	木	來		春	だ	芽	り	年	螢
送料 料價	送料 料價	送料 料價	送料 料價	送料 料價	近 刊	送料 料價	送料 料價	送料 料價	送料 料價	送料 料價	送料 料價
一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二八 八〇		一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二五 八〇	一 二五 八〇

